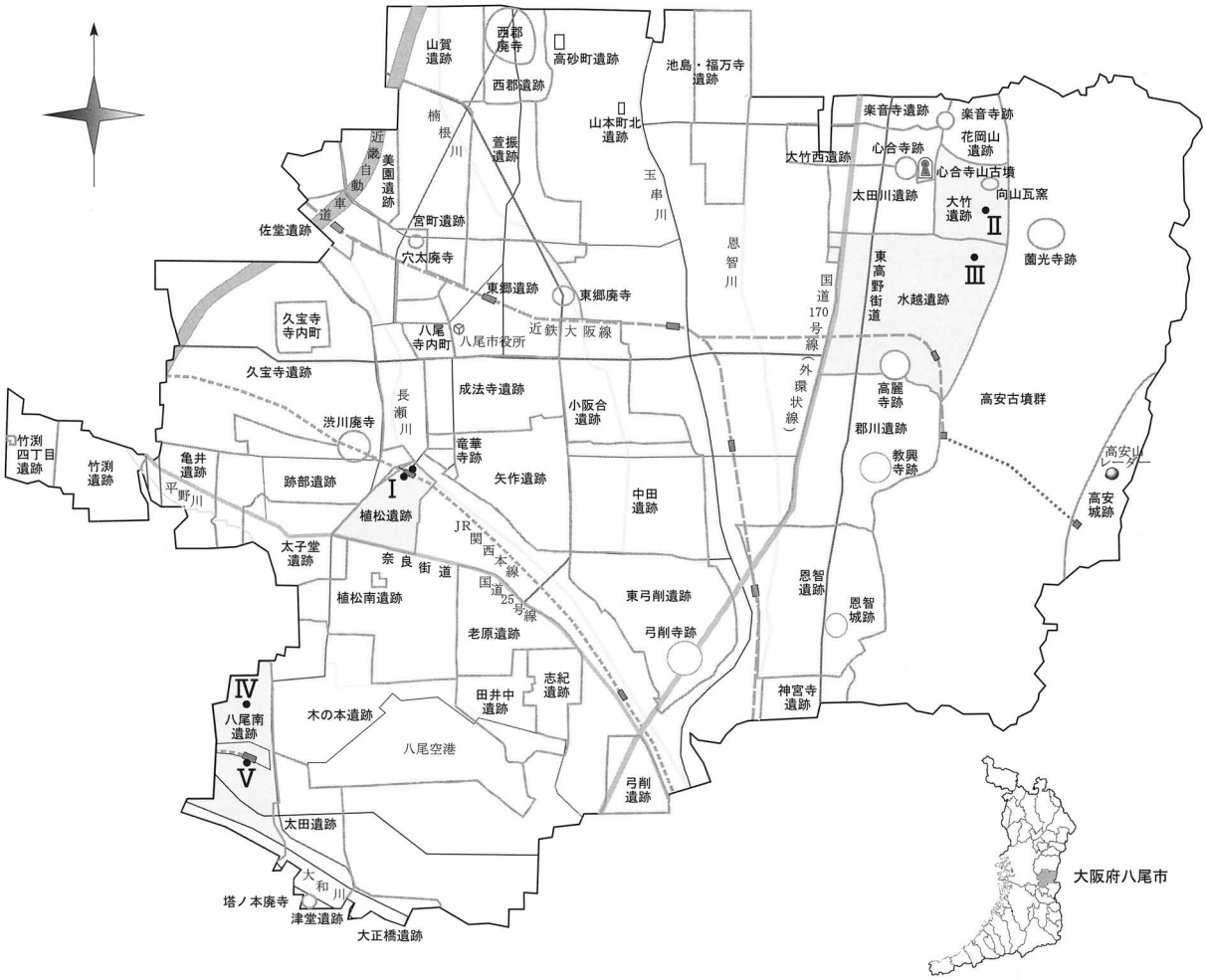
財団法人八尾市文化財調査研究会報告134

Ⅰ 植松遺跡（第11・12次調査）
Ⅱ 大竹遺跡（第２次調査）
Ⅲ 水越遺跡（第10次調査）
Ⅳ 八尾南遺跡（第34次調査）
Ⅴ 八尾南遺跡（第35次調査）

２０１１年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

Ⅰ 植松遺跡（第11・12次調査）
Ⅱ 大竹遺跡（第２次調査）
Ⅲ 水越遺跡（第10次調査）
Ⅳ 八尾南遺跡（第34次調査）
Ⅴ 八尾南遺跡（第35次調査）



２０１１年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。八尾市は古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く存在しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

本書は、平成21・22年度に行いました公共事業に伴う発掘調査の成果を収録したものであります。主な成果としては、水越遺跡で中世末～近世初頭、八尾南遺跡では古墳時代初頭、古代、中世、近世にわたる集落域が確認されました。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年３月

財団法人　八尾市文化財調査研究会
理事長　西　浦　昭　夫

序

1．本書は、財団法人八尾市文化財調査研究会が平成21・22年度に実施した公共事業に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成23年３月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は，下記の目次のとおりである。
1．本書に収録した各調査報告の文責は、Ⅰ・Ⅳ成海佳子、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ坪田真一で、全体の構成・編集は坪田が行った。
1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市役所発行の2,500分の１（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成22年度版）をもとに作成した。
1．本書で用いた高さの基準は東京湾標準潮位（T.P.）である。
1．本書で用いた方位は磁北あるいは座標北（国土座標第Ⅵ系〔世界測地系〕）を示している。
1．遺物実測図の断面は、須恵器・陶磁器が黒、他は白とした。
1．土色については『新版標準土色帖』1997年後期版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

目　　次

はしがき
序
Ⅰ　植松遺跡第11・12次調査（ＵＭ2009－11・12）……1
Ⅱ　大竹遺跡第２次調査（ＯＴ2010－２）……11
Ⅲ　水越遺跡第10次調査（ＭＫ2009－10）……15
Ⅳ　八尾南遺跡第34次調査（ＹＳ2009－34）……23
Ⅴ　八尾南遺跡第35次調査（ＹＳ2010－35）……35
報告書抄録

Ⅰ　植松遺跡第11・12次調査(ＵＭ2009－11・12)

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市安中町四丁目地内で、駅舎・道路等建設に伴い実施した植松遺跡第11・12次調査（ＵＭ2009－11・12）の発掘調査報告書である。

1．本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．調査は当調査研究会　成海佳子が担当した。

1．各調査の要項は下記のとおりである。

	第11次調査（ＵＭ2009－11）	第12次調査（ＵＭ2009－12）
調 査 地	八尾市安中町四丁目地内	八尾市植松町三・四丁目地内
調査原因	駅舎・道路等建設（その２）	駅舎・道路等建設（その１）
調査期間	平成22年１月26日～３月５日	平成22年１月27日～３月５日
調査日数	１日	４日
調査面積	約６㎡	約36㎡

1．現地調査には、市森千恵子・田島宣子・徳谷尚子・西出一樹の参加を得た。

1．内業整理は現地調査終了後に着手して平成23年３月をもって終了した。

1．本書の執筆・編集は成海が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……1
2．第11次調査……1
　1）調査方法と経過……1
　2）基本層序……2
　3）検出遺構と出土遺物……2
　4）まとめ……2
3．第12次調査……3
　1）調査方法と経過……3
　2）調査成果……3
　3）まとめ……6

Ⅰ　植松遺跡第11・12次調査（ＵＭ2009－11・12）

１．はじめに

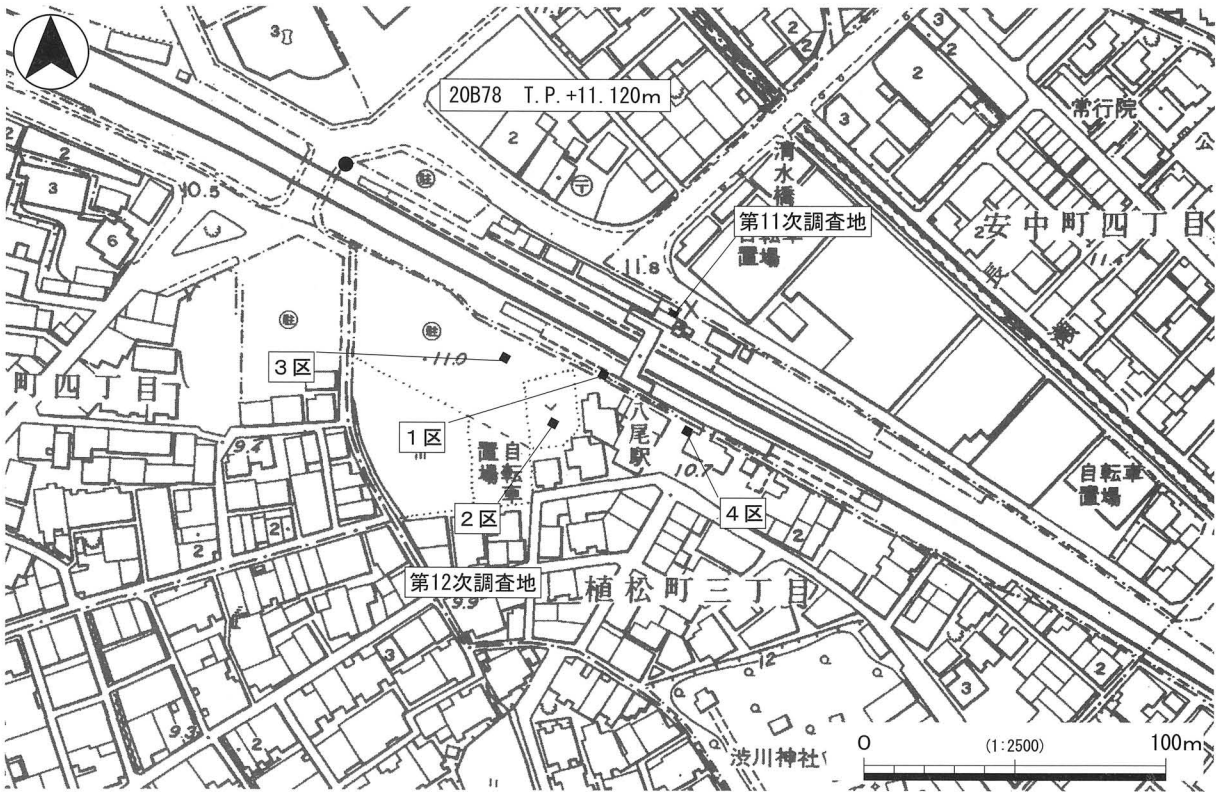
植松遺跡は八尾市南西部に位置する遺跡である。その範囲は東西約0.8km・南北約0.8kmにおよび、現在の行政区画では安中町四丁目・植松町三～八丁目・永畑町二・三丁目にあたる。地理的には旧大和川の主流であった古長瀬川と古平野川の分岐点付近に位置しており、中央部に古平野川の自然堤防が形成されている。この自然堤防上には、跡部遺跡・太子堂遺跡・亀井遺跡・竹渕遺跡などが連なって位置している。

当遺跡発見の経緯は、昭和56（1981）年に八尾市教育委員会が永畑町二丁目で行った発掘調査で、平安時代前期の居住域が検出されたことによる。その後、大阪府教育委員会・財団法人大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって、数件の調査が行われている。これまでの調査結果から、自然堤防は古墳時代後期～平安時代の埋没河川であること、南部の沖積地上には弥生時代前期～中期の居住域や墓域、古墳時代前期の居住域、奈良時代の生産域、平安時代の居住域、さらに中近世の遺構・遺物などが検出されている。

２．第11次調査

１）調査方法と経過

今回の調査は、当研究会が植松遺跡内で行った第11次調査にあたる。調査原因は、ＪＲ八尾駅周辺の整備事業に伴うもので、掘削範囲は径約２×３ｍ、面積は約６㎡である。調査で使用した



第１図　調査地周辺図

高さの基準は調査区北西120m地点の八尾市街区多角点(20B78:T.P.+11.120m)である。

掘削方法は、現地表下0.4～0.5m前後までの盛土を機械掘削とし、1層以下6層粗粒砂上面までの1.0m間を機械・人力掘削を併用した。その結果、6層上面で東への落込みを検出した。その後、部分的に重機にて掘削を続行し、粗粒砂が1.5mにわたって堆積しているのを確認した。

2）基本層序

第0層：盛土。既存建物建設・解体時の攪乱等が見られる。上面の標高は11.8m前後である。

第1層：黄褐色粘土質シルト、層厚0.3m前後、上面の標高は11.4m前後である。コンクリートやレンガなどが見られることから、駅舎建設に関わる近代の盛土・整地の可能性がある。

第2層：暗黄色砂質シルト、層厚0.1～0.2m。炭等を含む土壌化層である。

第3層：黄褐色砂質シルト、層厚0.1m前後。

第4層：黄灰色シルト～極細粒砂、層厚0.1m前後。

第5層：黄褐色極細粒砂、層厚0.1～0.2m。

第6層：黄灰色粗粒砂、層厚1.5m以上。

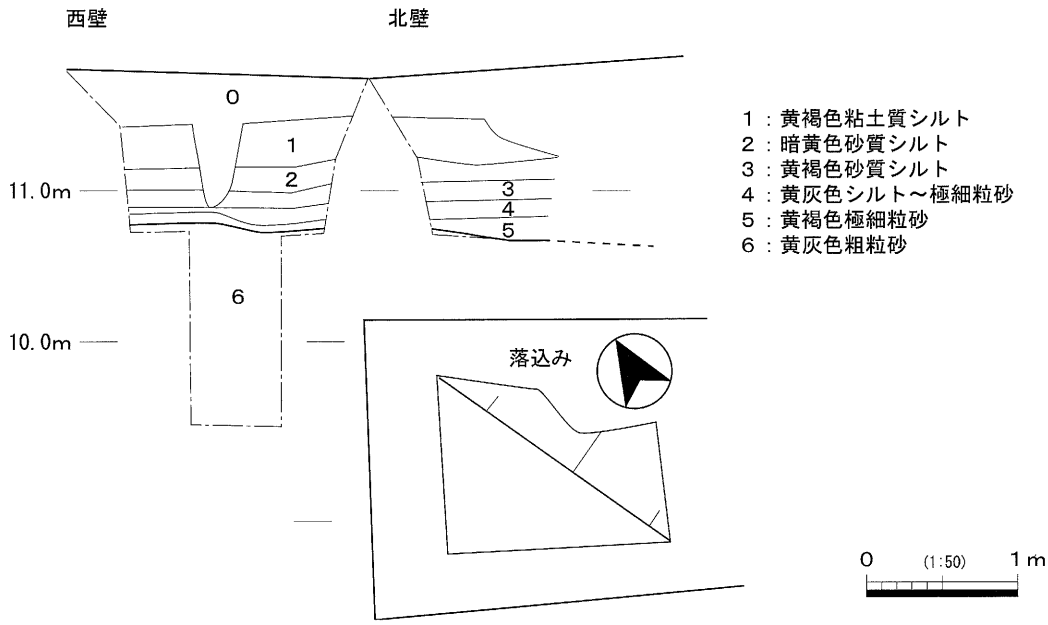
3）検出遺構と出土遺物

現地表下1.1m(T.P.＋10.8m)前後の第6層黄灰色粗粒砂上面で、落込み1か所を検出した。西から東に落ち、深さ0.15mまでを確認した。内部には第5層黄褐色極細粒砂が堆積する。

調査では遺物は出土していない。

4）まとめ

第6層は古大和川の主流の一つである長瀬川に起因する河川埋土にあたる。また、第4層・第5層も流水堆積層である。第6層上面で検出した落込みは、河川埋没の過程で形成されたものと考えられる。



第2図　平断面図

３．第12次調査

１）調査方法と経過

今回の調査は、当研究会が植松遺跡内で行った第12次調査にあたる。調査原因は、ＪＲ八尾駅周辺の整備事業に伴うもので、掘削範囲は径約３×３ｍ×４か所（１～４区）、面積は約36㎡である。調査で使用した高さの基準は調査地北西120ｍ地点の八尾市街区多角点（20B78：T.P.+11.120ｍ）である。

掘削方法は、現地表下0.5～１ｍ前後までの盛土を機械掘削とし、以下１～1.5ｍ間を機械・人力掘削を併用し、遺構・遺物の検出に努めた。その後、部分的に１ｍ前後を機械掘削し、下層の堆積状況を確認した。その結果、２区の現地表下2.5ｍ（T.P.＋９ｍ）前後で遺物包含層を、現地表下2.7ｍ（T.P.+8.8ｍ）前後で土壌化層を検出した。

２）調査成果

・１区

〈層序〉

第100層：盛土。既存建物建設・解体時の攪乱等が見られる。上面の標高は12.0ｍ前後である。

第101層：黄褐色粘土質シルト・灰褐色粘土質シルト・礫などからなるブロック層で、炭を含む。層厚0.3ｍ前後、上面の標高は10.8ｍ前後である。この層上面で溝を検出した。

第102層：黄褐色細粒砂、層厚0.5ｍ前後。

第103層：黄褐色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.15ｍ前後。

第104層：黄褐色砂質シルト、層厚0.9ｍ前後。

第105層：灰色粘土質シルト、層厚0.2ｍ前後。

第106層：青灰色粘土質シルト黄灰色粗粒砂、層厚0.3ｍ以上。

〈検出遺構と出土遺物〉

現地表下1.1ｍ（T.P.＋10.9ｍ）前後の第101層上面で溝１条（ＳＤ111）を検出した。幅0.4ｍ・深さ0.15ｍ・検出長1.9ｍを測る。埋土は①灰色粗粒砂、遺物は出土していない。地層から、近代の遺構と考えられる。

・２区

〈層序〉

第200層：盛土。既存建物建設・解体時の攪乱等が見られる。上面の標高は11.3～11.5ｍ前後である。

第201層：黄褐色粘土質シルト・灰褐色粘土質シルト・礫などからなるブロック層で、炭を含む。層厚0.3～0.5ｍ前後、上面の標高は10.9ｍ前後である。この層上面で溝（ＳＤ211）を検出した。

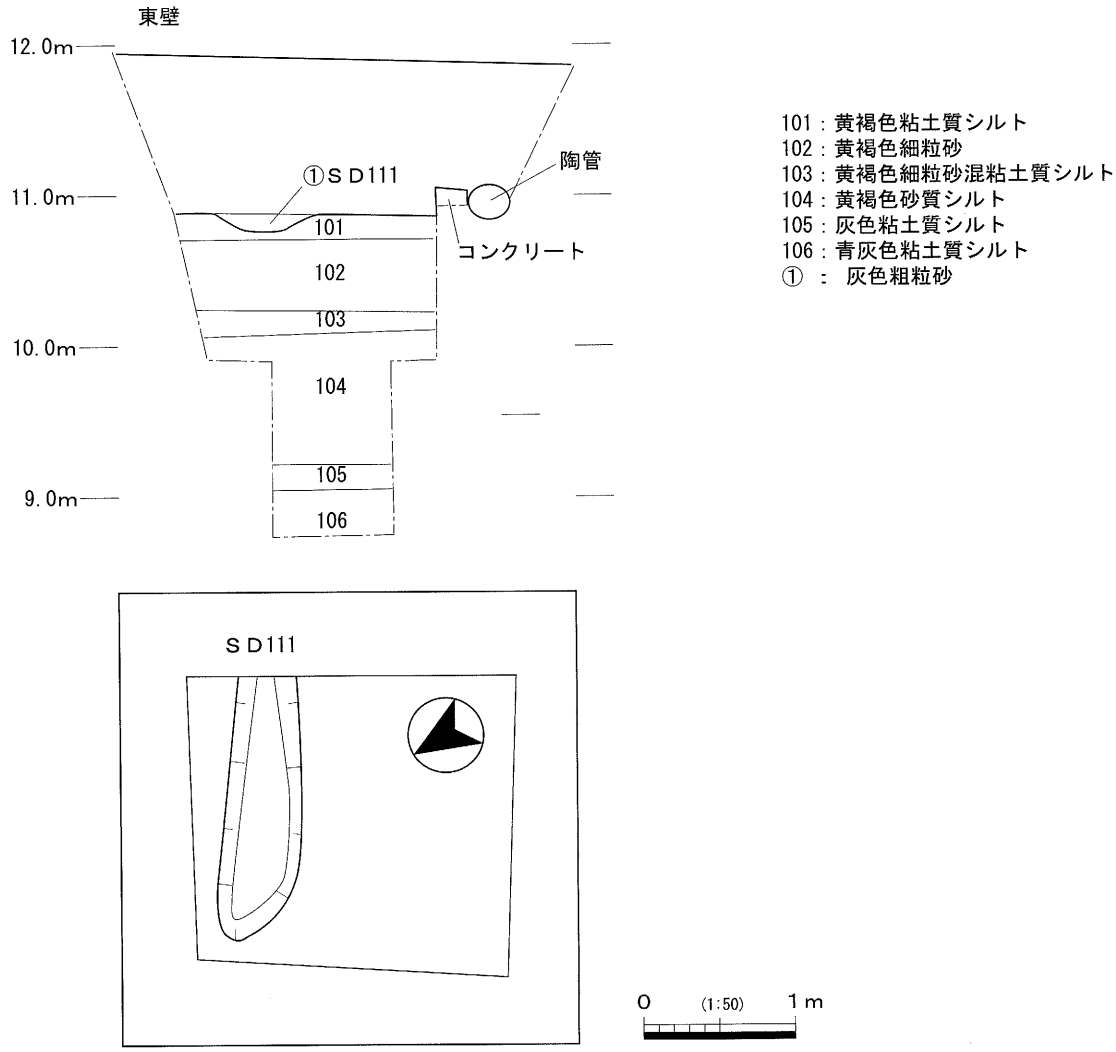
第202層：黄褐色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.5ｍ前後。

第203層：黄褐色粘土質シルト・灰色粘土質シルトのブロック層、層厚0.5ｍ前後、この層上面で溝（ＳＤ221）を検出した。

第204層：褐色極細粒砂、層厚0.1ｍ前後。

第205層：褐色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.1ｍ前後。

第206層：褐色極細粒砂混粘土質シルト、層厚0.1～0.3ｍ、北下がりに堆積する。



第３図　１区平断面図

第207層：灰色粘土質シルト・黄褐色粘土質シルトのブロック、層厚0.2～0.3m前後。内部に土師器の小片を含む。

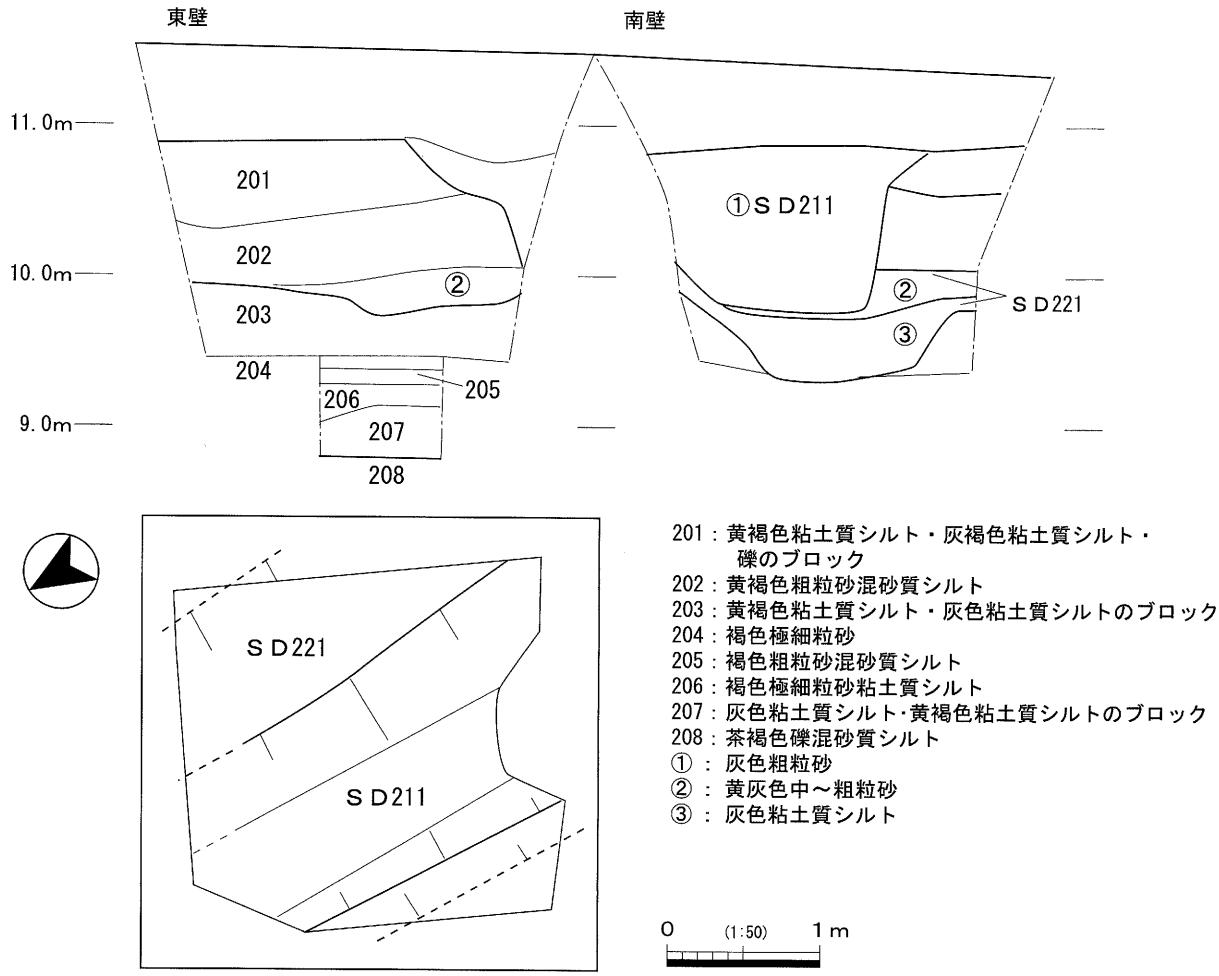
第208層：茶褐色礫混砂質シルト、土壌化層である。この層上面で掘削を終えたため、層厚は確認していない。

〈検出遺構と出土遺物〉

現地表下0.7m(T.P.＋10.9m)前後の第201層上面で、溝１条(ＳＤ211)を検出した。幅2.1m・深さ1.1m測る。埋土は①灰色粗粒砂、遺物は出土していない。１区-ＳＤ111同様、近代の遺構であろう。

現地表下1.6m(T.P.＋10.0m)前後の第203層上面で、溝１条(ＳＤ221)を検出した。幅1.8m・深さ0.7m・検出長1.9mを測る。埋土は②黄灰色中～粗粒砂・③灰色粘土質シルトからなる。遺物は出土していない。

現地表下2.5m(T.P.＋9.0m)前後に堆積する第207層から、土師器の小破片が若干出土した。平安時代頃のものと考えられる。



第４図　２区平断面図

・３区

〈層序〉

第300層：盛土。既存建物建設・解体時の攪乱等が見られる。上面の標高は11.5m前後である。

第301層：黄褐色礫混粘土質シルト、層厚0.4～0.5m、上面の標高は11m前後である。

第302層：黄褐色～青灰色粘土質シルト、層厚0.5m前後。この層上面で溝１条（ＳＤ311）を検出した。

第303層：青灰色極細粒砂混粘土質シルト、0.3m前後

第304層：青灰色極細粒砂、層厚０～0.2m前後。

第305層：黄灰色極細粒砂混粘土質シルト、層厚0.6m前後。

第306層：灰色粗粒砂、層厚0.2m。

第307層：灰色粘土質シルト、層厚0.1m前後

第308層：暗青灰色粘土質シルト、0.4m前後。

第309層：白灰色粗粒砂～礫、0.25m前後。

〈検出遺構と出土遺物〉

現地表下0.9m(T.P.＋10.5m)前後の第302層上面で、溝１条(ＳＤ311)を検出した。幅0.6m以上・深さ0.3mを測る。埋土は④黄褐色礫多量混砂質シルト、遺物は出土していない。

この他、302～304層は溝状遺構の埋土の可能性がある。また、最下の309層から305層にかけて砂脈が見られ、305層上面に噴砂(⑤)が見られる。

・４区

〈層序〉

第400層：盛土。上面の標高は11.2m前後である。

第401層：黒褐色粗砂、層厚0.2m前後、上面の標高は11m前後である。盛土の可能性があり、この層上面で、横矢板が設置されている溝(ＳＤ411)を検出した。

第402層：黄褐色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.2m前後。

第403層：黄褐色極細粒砂混粘土質シルト、層厚0.4m前後。

第404層：黄褐色細粒砂混粘土質シルト、層厚0.25m前後。

第405層：黄褐色中～粗粒砂混粘土質シルト、層厚0.25m前後。

第406層：赤褐色粗粒砂混粘土質シルト、層厚0.15m前後。

第407層：灰色粘土質シルト、層厚0.1m前後。

第408層：青灰色粘土質シルト、層厚0.2m前後。

第409層：暗青灰色礫混粘土質シルト、0.25m前後。

〈検出遺構と出土遺物〉

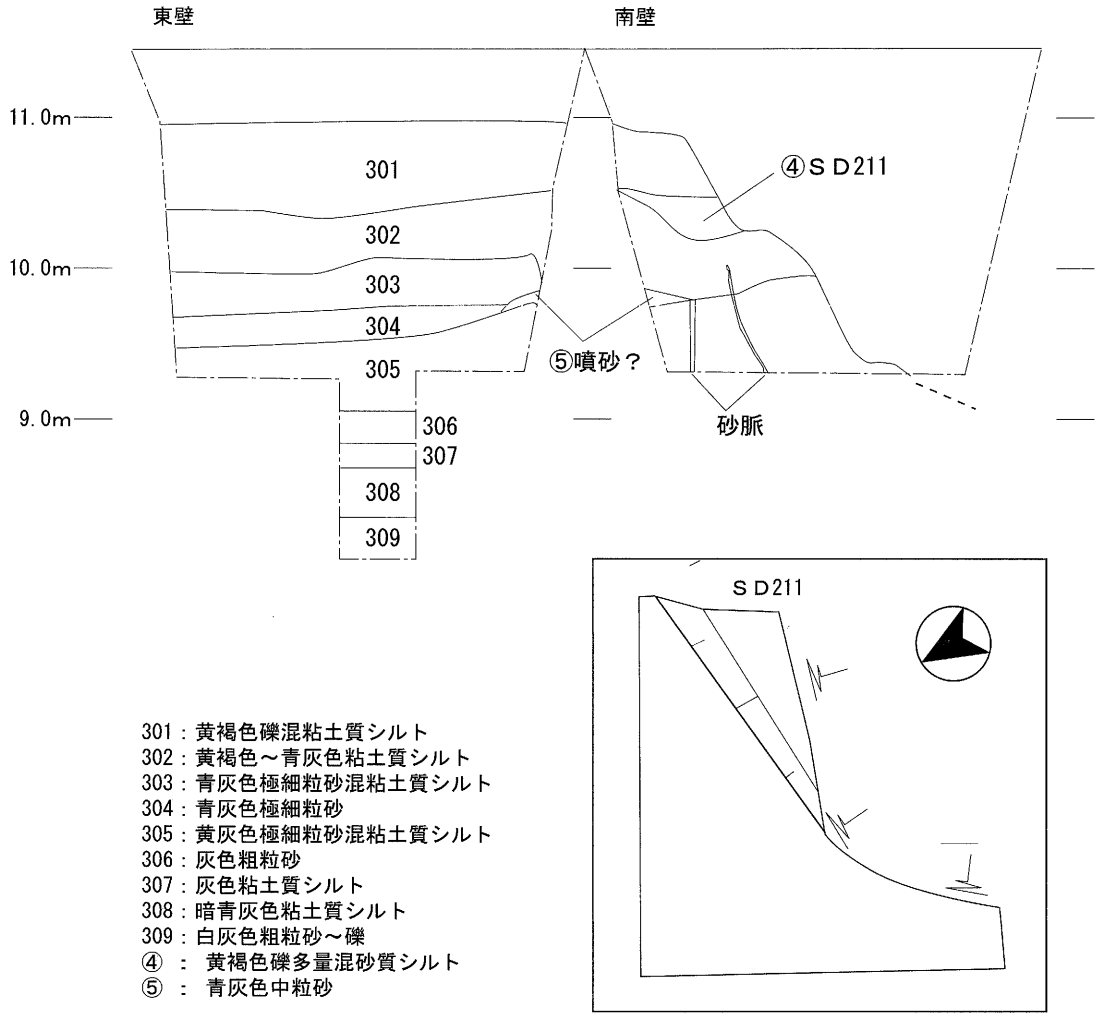
現地表下0.2m(T.P.+11m)の第401層上面で溝１条(ＳＤ411)を検出した。検出幅１ｍ・深さは1.3mを測る。内部には枕木転用の材が２列・７本積み重ねられている。埋土は⑥黄褐色シルト～粗粒砂～礫のブロック・⑦青灰色粗粒砂からなり、枕木の裏込めとしている。駅舎の方向に一致していることから、近年の施設と考えられる。

３）まとめ

今回の調査では、上層部で近代～近世の遺構面、さらに下層で平安時代頃の土壌化層を検出することができた。ＪＲの駅舎を挟んだ北東50mの第11次調査地や200m南東の第10次調査地では、比較的浅い現地表下1.1～1.5m(T.P.＋11m)前後で古長瀬川に起因する河川埋土(粗粒砂)に至り、第10次調査地では上面で近世の遺構が検出されている。当調査地では、粗粒砂層は３区の現地表下3.2m(T.P.＋8.3m)前後で検出されたのみで、近世以前の古長瀬川の流路からは外れていることがわかった。

・参考文献

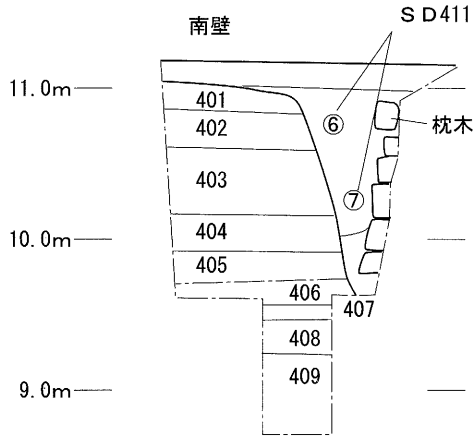
成海佳子2008 「植松遺跡第10次調査(ＵＭ2006－10)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告113』財団法人八尾市文化財調査研究会



301：黄褐色礫混粘土質シルト
302：黄褐色～青灰色粘土質シルト
303：青灰色極細粒砂混粘土質シルト
304：青灰色極細粒砂
305：黄灰色極細粒砂混粘土質シルト
306：灰色粗粒砂
307：灰色粘土質シルト
308：暗青灰色粘土質シルト
309：白灰色粗粒砂～礫
④　：　黄褐色礫多量混砂質シルト
⑤　：　青灰色中粒砂

0　(1:50)　1m

第５図　３区平断面図

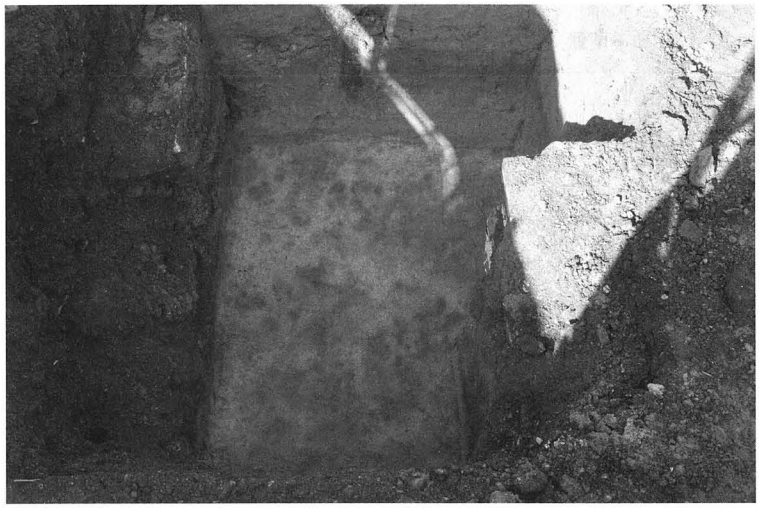


401：黒褐色粗粒砂
402：黄褐色粗粒砂混砂質シルト
403：黄褐色極細粒砂混粘土質シルト
404：黄褐色細粒砂混粘土質シルト
405：黄褐色中～粗粒砂混粘土質シルト
406：赤褐色粗粒砂混粘土質シルト
407：灰色粘土質シルト
408：青灰色粘土質シルト
409：暗青灰色礫混粘土質シルト
⑥　：　黄褐色シルト～粗粒砂～礫のブロック
⑦　：　青灰色粗粒砂

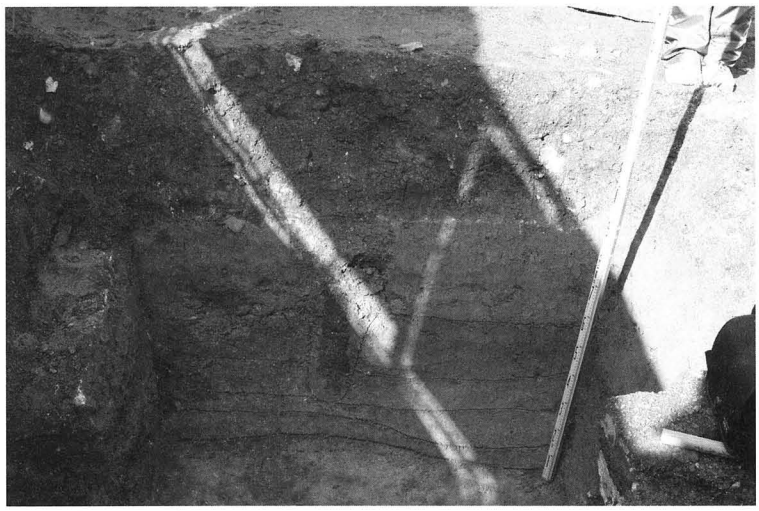
0　(1:50)　1m

第６図　４区断面図

図版1　第11次調査

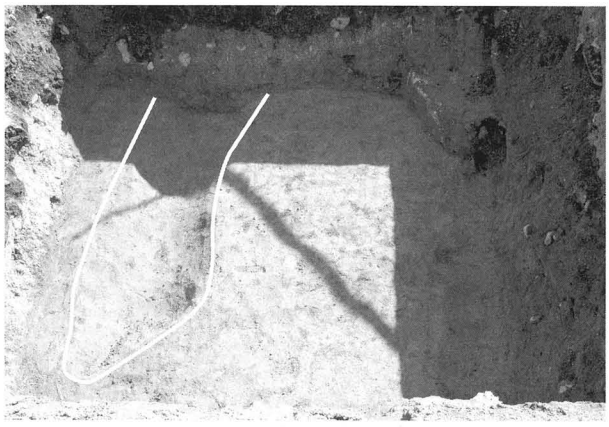


6層上面（東から）



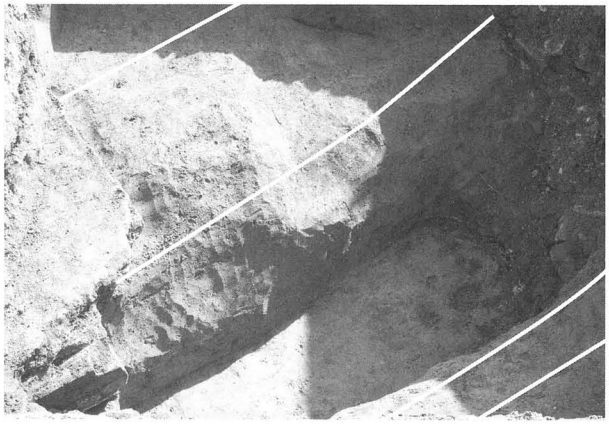
西壁

下層確認（東から）



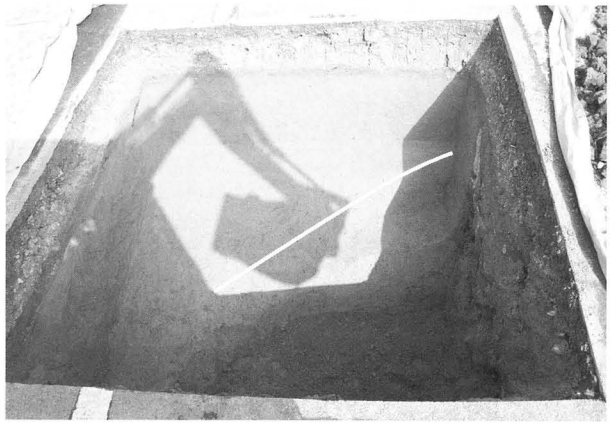
１区101層上面（西から）

１区東壁（102層以下）



２区203層上面（西から）

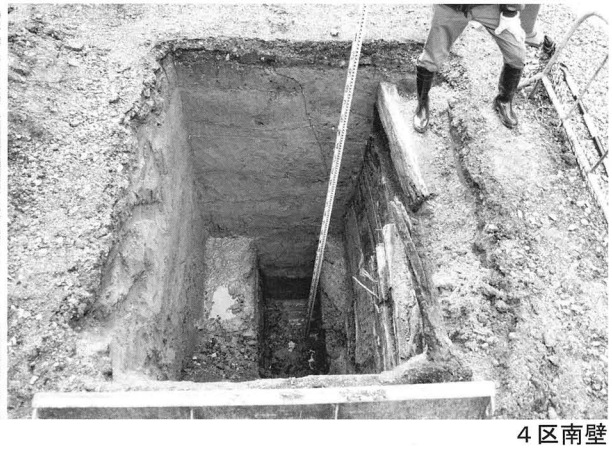
２区東壁（203層以下）



３区302層上面（南から）

３区東壁（301層以下）

４区405層上面（北から）



４区南壁

Ⅱ　大竹遺跡第２次調査（ＯＴ2010－２）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市水越８丁目地内で実施した市道高安第９号線路側整備工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する大竹遺跡第２次調査（ＯＴ2010－２）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成23年１月25日～１月27日（実働３日）に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約15㎡である。

1．現地調査・内業整理業務においては、梶本潤二・芝崎和美の参加を得た。

1．整理業務は、現地調査終了後随時実施し、平成23年３月に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……11
2．調査概要……12
　1）調査の方法と経過……12
　2）基本層序……12
　3）検出遺構と出土遺物……12
3．まとめ……12

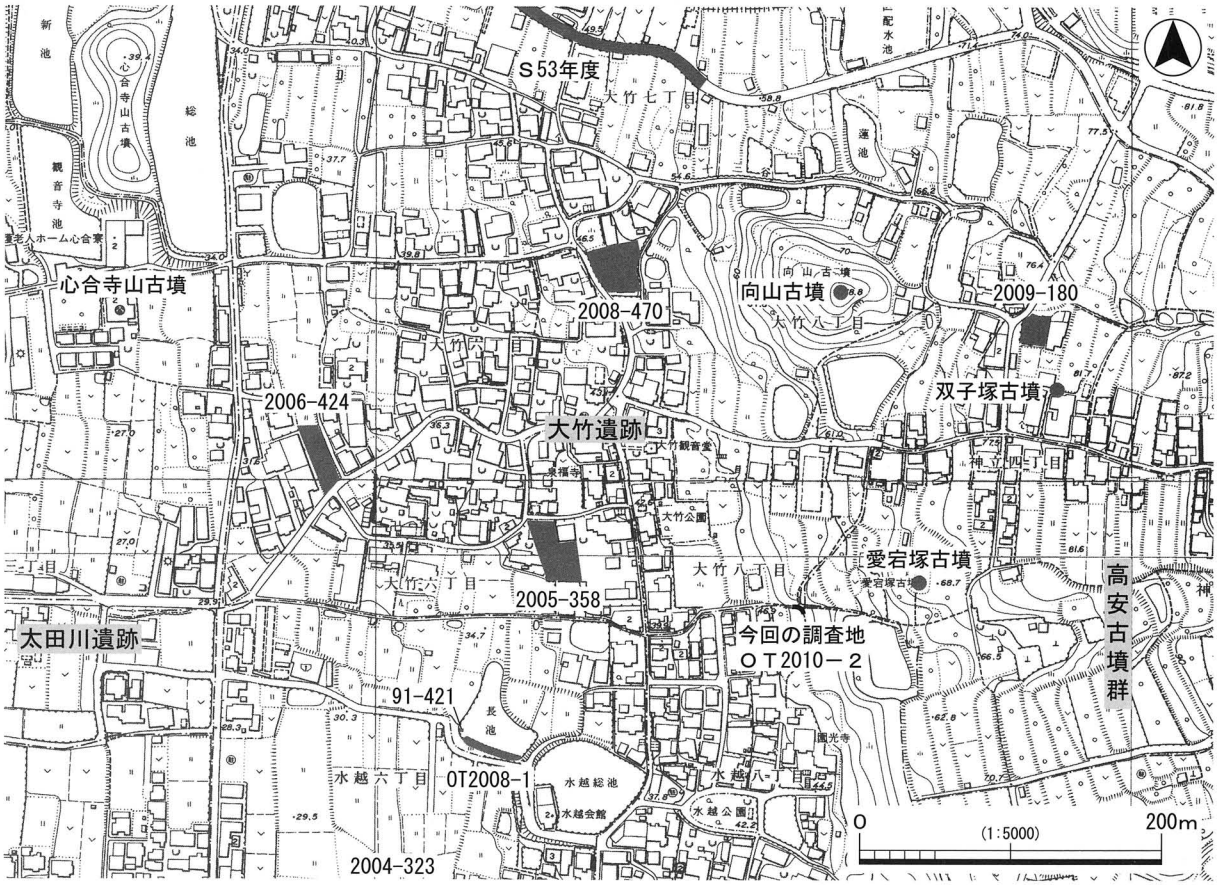
Ⅱ　大竹遺跡第２次調査（ＯＴ2010－２）

１．はじめに

大竹遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹６～８丁目、水越６・８丁目、神立３・４・６丁目の一部を含む遺跡で、東西約500m、南北約600mの範囲に広がる。

地理的には生駒山地西麓の扇状地に位置し、北に花岡山遺跡、東に高安古墳群、南に水越遺跡、西に心合寺山古墳・大竹西遺跡・太田川遺跡が接する。また遺跡東部は高安古墳群の一画である楽音寺・大竹古墳群にあたり、前期の向山古墳や、後期の愛宕塚古墳、双子塚古墳などが遺跡内に存在している。向山古墳の乗る丘陵南斜面には平安時代の向山瓦窯跡が存在する。

当遺跡内では昭和初期以降、縄文時代に遡る石器が採集されていたが、最初に考古学的な発掘調査が実施されたのは昭和53(1978)年度のことである。この調査は花岡山遺跡との境界となる遺跡北端の道路上で実施された水道管布設に伴うものであった。調査では弥生時代後期の土器が大量に出土した大溝をはじめ、古墳時代の遺物包含層等が確認されている。それ以降は小規模な遺構確認調査が数件実施されている程度であり、顕著な遺構・遺物は確認されていないため、遺跡の実態は不明な点が多いといえる。ただし古墳についての調査は実施されており、中期の心合寺山古墳は史跡整備に伴う調査や周囲の池(周濠)の改修に伴う調査がなされ、北・中河内最大の全長160mを測る古墳の実像が明らかとなっている。また後期の愛宕塚古墳では発掘調査がなされ、府下最大級の横穴式石室からは馬具等の副葬品が多数出土している。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は市道高安第９号線路側整備工事に伴う調査で、当調査研究会が大竹遺跡内で行った第２次調査（ＯＴ2010－２）である。

工事は市道高安９号線がカーブする部分の内側に擁壁を設置するものである。幅約1.6m、延長約16mにわたる掘削を伴う工事区間の内、長さ約3.0mの調査区３箇所（西から１～３区）を設定し、調査を実施した。総面積は約15㎡である。

調査は、道路面以下約1.0～1.7mまでを機械・人力掘削併用で実施した。道路際を垂直に掘削するため直後に土留めを設置する必要があり、調査に際しては道路際に法面を設定して掘削し、その法面を断面観察の対象とした。平面・断面の調査完了後、法面の掘削についても立会い、調査を完了した。

平面図は工事図面を使用した。

標高の基準は、調査地西部に位置する八尾市街区補助点〈3A412:T.P.+49.678m〉を使用した。

２）基本層序

現地表面である道路面の標高はT.P.+52.6～53.7mを測り、道路のカーブ地点である２区が最も高くなっている。０層は全域で見られた表土層で、締まりの悪い層相である。上面はアスファルト（厚さ約５㎝）である。１層は３区で見られたシルト～細粒砂層で、水成層である。洪水起原と考えられる。２層は全域で見られた砂礫層（岩盤）で、いわゆる地山層である。現地表面に沿う形で２区東部が最も高く、また北・東に向かってさらに高くなる状況である。

３）検出遺構と出土遺物

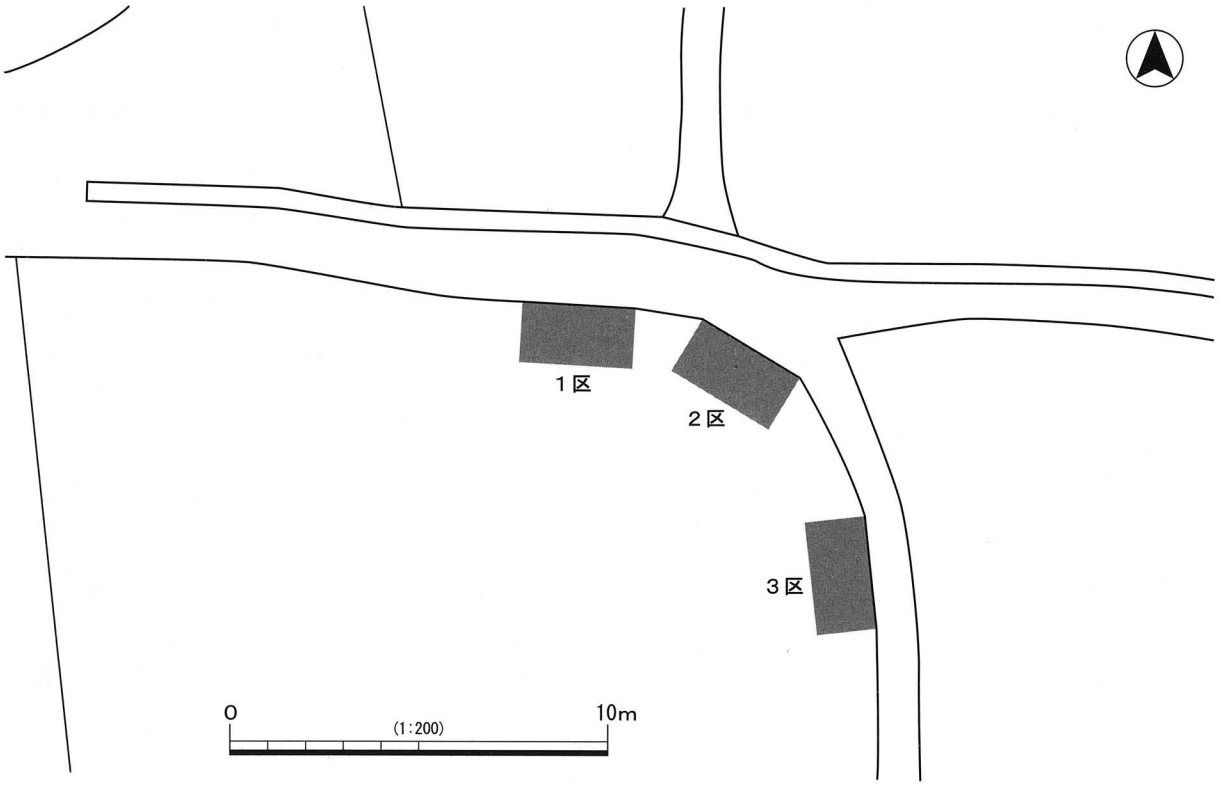
遺構・遺物共に検出されなかった。

３．まとめ

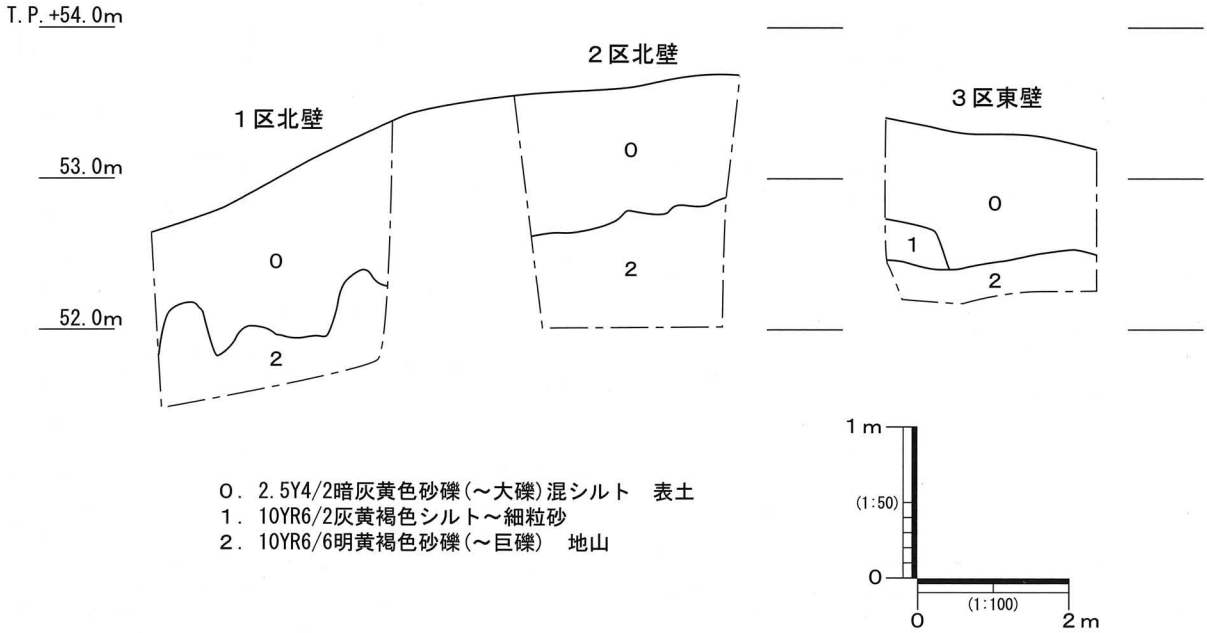
今回の調査では、表土層直下が地山層であることを確認した。調査地は生駒山地西側の西に延びる丘陵上にあたり、東約80m地点には後期古墳である愛宕塚古墳が構築されている。調査地点である道路カーブ地点の現況は隆起していたため、古墳の存在も想定されたが、地山面の高まりに沿うもので、墳丘盛土や遺構等は認められなかった。

参考文献

・村川行弘1980『河内　大竹遺跡－八尾市水道局低区第３配水池送配水管布設用地内埋蔵文化財発掘調査報告－』八尾市教育委員会
・安井良三1994『河内愛宕塚の研究』八尾市立歴史民俗資料館
・吉田野乃編2001『史跡心合寺山古墳発掘調査概要報告書－史跡整備に伴う発掘調査の概要－　八尾市文化財調査報告45　史跡整備事業調査報告２』八尾市教育委員会
・木村健明2009「Ⅰ　大竹遺跡第１次調査（ＯＴ2008－１）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告128』財団法人八尾市文化財調査研究会



第２図　平面図



第３図　断面図

図版1

調査地全景（西から）

１区調査状況（北東から）

１区全景（西から）

１区北壁

２区全景（西から）

２区北壁

３区全景（北から）

３区東壁

Ⅲ　水越遺跡第10次調査（ＭＫ2009－10）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市水越七丁目地内で実施したトンボ池改修工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する水越遺跡第10次調査（ＭＫ2009－10）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成22年１月12日～１月19日（実働６日）に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約95.3㎡である。

1．現地調査・内業整理業務においては、梶本潤一・田島宣子・西出一樹の参加を得た。

1．本書作成に関わる内業整理業務は、遺物実測－飯塚直世･市森千恵子･村井俊子、遺物トレース－市森が行った。

1．整理業務は、現地調査終了後随時実施し、平成23年３月に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……15
2．調査概要……16
　1）調査の方法と経過……16
　2）基本層序……17
　3）検出遺構と出土遺物……18
3．まとめ……20

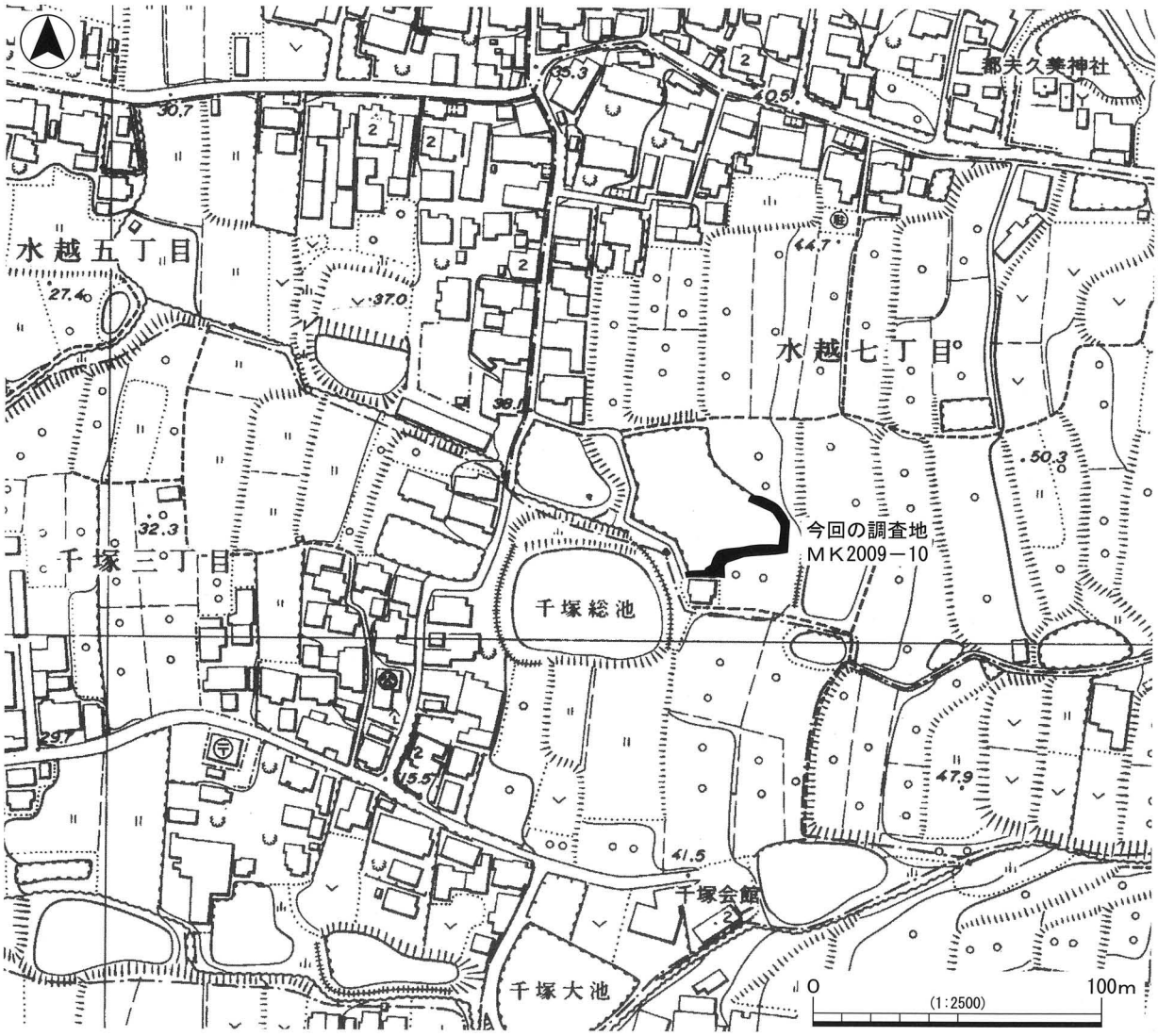
Ⅲ　水越遺跡第10次調査（ＭＫ2009－10）

１．はじめに

水越遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では水越・千塚・大窪・服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡に接しており、東側には高安古墳群が広がっている。

当遺跡内では、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世にわたる複合遺跡であることが認識されている。

今回の調査地は遺跡北東部に当たり、周辺ではこれまであまり発掘調査は行われておらず、遺跡の様相が不明な地域といえる。



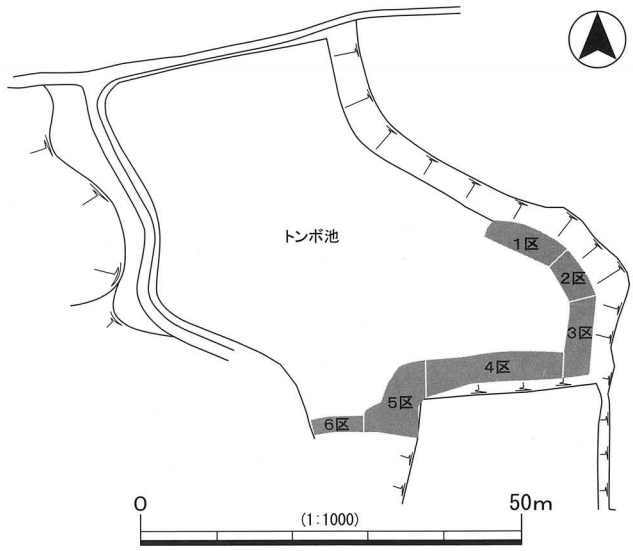
第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

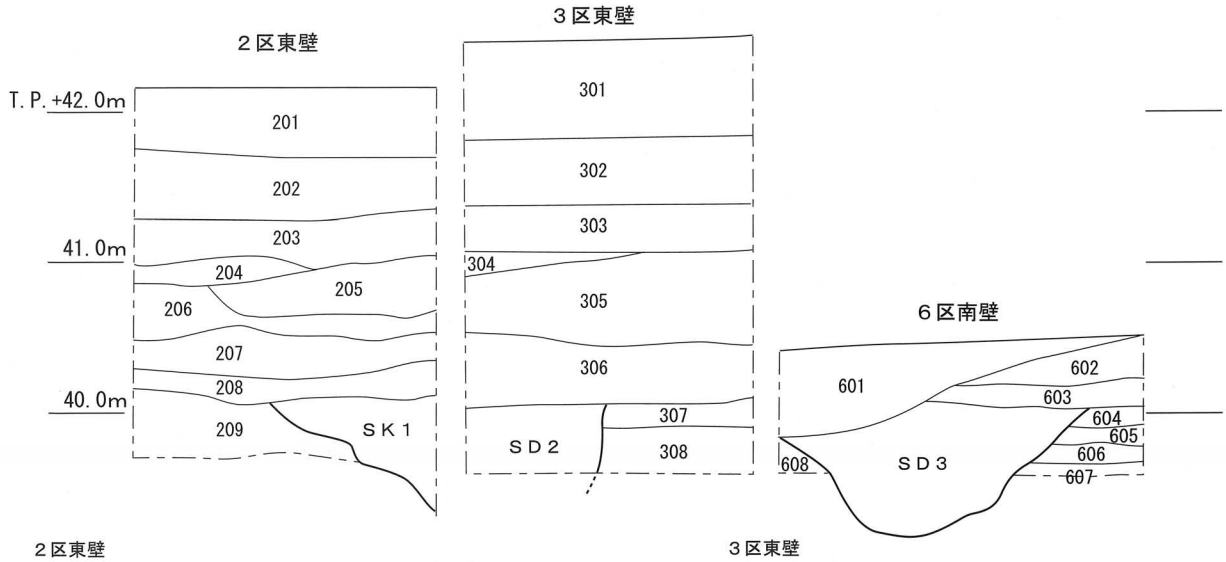
今回の調査は溜池であるトンボ池改修工事に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第10次調査(ＭＫ2009－10)である。

調査区は池の周囲の東部～南部に沿うもので、幅約1.5m、延長約63.5mの不定形な細長いトレンチ状を成す。地区割りは調査区の形状に合わせて北から１～６区を設定し、１区から調査を実施した。掘削は、池底に当たる現地表(約T.P.+40.6～40.8m)下約0.5mまでを機械掘削し、以下は人力掘削により調査を行った。



第２図　調査区位置図

標高の基準は、調査地西部に位置する八尾市街区多角補助点〈1A117：T.P.+43.003m〉を使用した。また平面実測の基準は任意に設置した杭を基準とした。



２区東壁
201　2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂～細礫混シルト　表土
202　10YR5/3にぶい黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト
203　2.5Y5/1黄灰色細粒砂～細礫混シルト～粘土質シルト
204　10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～細礫混シルト質粘土～粘土質シルト
205　7.5GY5/1緑灰色細粒砂～粗粒砂混シルト～粘土質シルト
206　10YR6/3にぶい黄橙色粘土～シルト混細粒砂～中礫
207　5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
208　2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルト
209　2.5GY5/1オリーブ灰色シルト混細粒砂～中礫

３区東壁
301＝201
302＝202
303＝203
304＝205
305　7.5GY5/1緑灰色極細粒砂～中粒砂混シルト質粘土
306　5Y5/1灰色中礫少混シルト～細粒砂互層
307　2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土～極細粒砂互層
308　10YR4/2灰黄褐色粘土～シルト

６区南壁
601　5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土～細粒砂互層　池埋土
602　2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土～シルト
603　10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Mn斑　Fe斑
604　10YR5/1褐灰色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Mn斑　Fe斑
605　10YR5/2灰黄褐色極細粒砂シルト質粘土　Mn斑
606　2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト
607　2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土～細粒砂
608　10Y4/1灰色細粒砂～大礫

1m
(1:50)
0

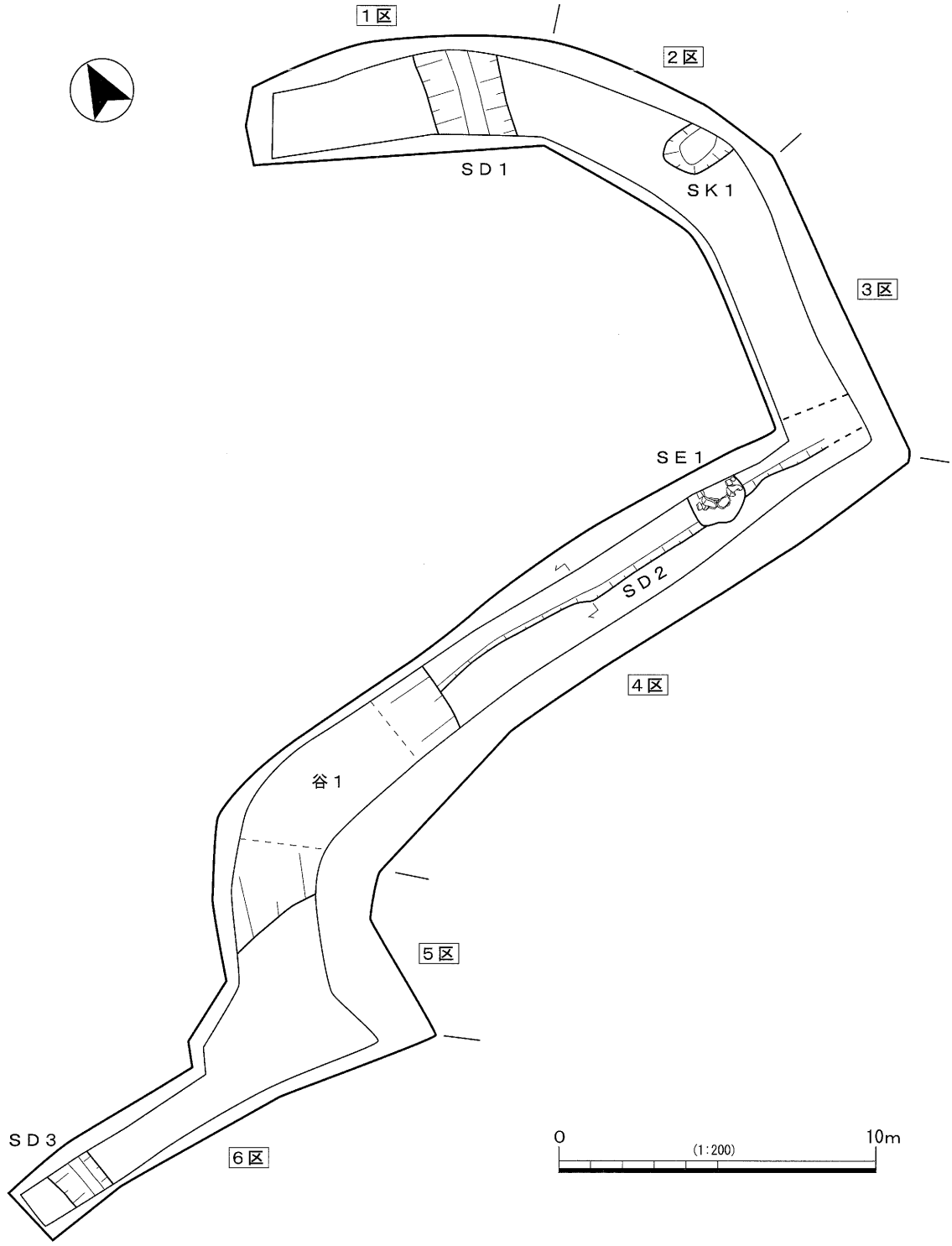
第３図　断面図

２）基本層序

２・３・６区の壁面を基本層序とする。

２・３区東壁では、201～205層、301～304層は池の堤として盛られた土層と考えられる。以下には細粒砂～中礫を多く含む湿潤な水成層が続くが、１・４・５区も同様の状況であった。

６区では、603～605層がMn斑・Fe斑を多く含む土壌化層で、西部でのみ見られた。



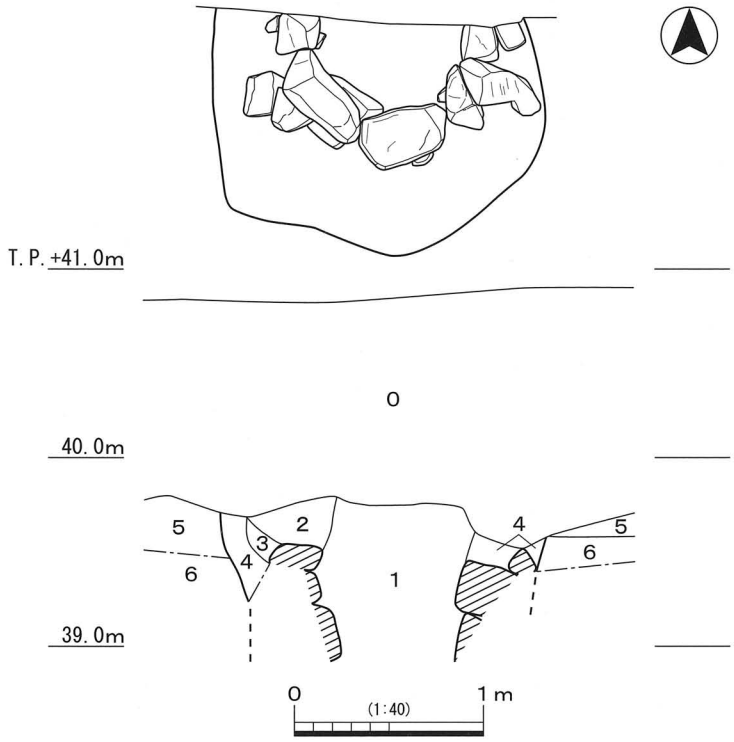
第４図　平面図

3）検出遺構と出土遺物

標高T.P.+40.0～40.1m、1～5区では水成層上面、6区では604層上面で、井戸1基（SE1）、土坑1基（SK1）、溝3条（SD1～3）、及び谷状地形（谷1）を検出した。

SE1

4区東部で南半分を検出したもので、石組み井戸である。井戸枠は自然石を円形に組み上げたもので、内径約70cmを測る。底までの掘削は実施しておらず、深さ等は不明である。遺物は枠内（1層）から楕円形の板材（1）が出土した。縁辺のうち短軸方向の一方が長さ約3cmに亘って直線をなす。法量は長径14.1cm・短径12.8cm・厚さ約6mmを測る。用途としては、周縁に釘孔等が見られないこと、また断面形状がやや台形を呈することから勘案して、はめ込み式の柄杓の底板等が考えられよう。なお当井戸はSD2を削平して構築されており、時期は室町時代頃と考えられる。石組み井戸としては八尾市域では同様に生駒山西麓部に位置する郡川遺跡、神宮寺遺跡に類例がある。



0．池の堆積土
1．10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～粗粒砂混粘土～シルト質粘土
　一部ラミナ　植物遺体
2．10YR4/1褐灰色シルト質粘土～細粒砂　ブロック状
3．2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土混細粒砂～中礫
4．5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土～中粒砂　ブロック状
5．10YR4/3にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土　SD2
6．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト混細粒砂～中礫

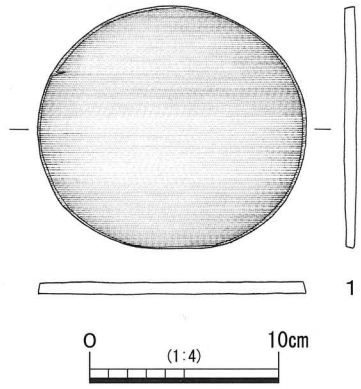
第5図　SE1平断面図

SK1

2区で西部を検出したもので、規模は東西2.0m以上・南北約1.5m・深さ約0.9mを測る。埋土は細粒砂～巨礫（～30cm）で、土石流による埋没と考えられる。遺物は出土していない。

SD1

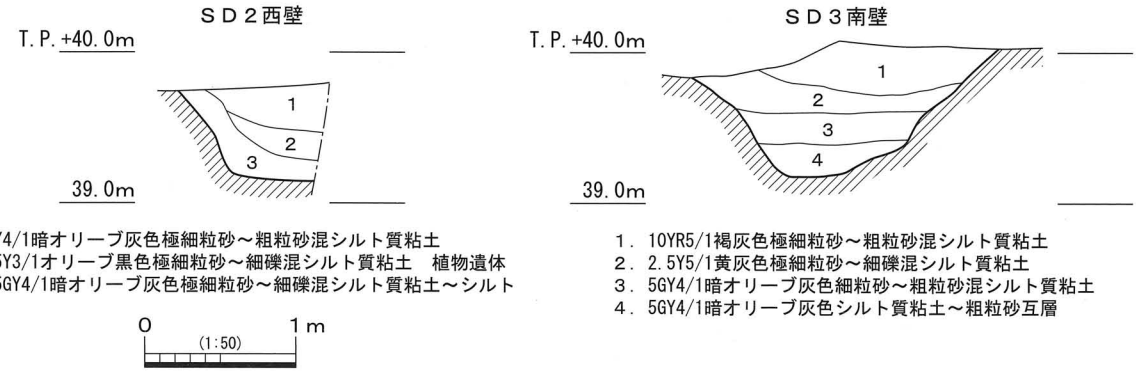
1区で検出した北東－南西方向の溝で、検出部分の幅約2.5m、深さは約30cmである。北壁によると、東から西に下がる段差約80cmの落ち込み状の堆積が認められ、その底部にあたる。埋土は上部がシルト～極粗粒砂互層、下部が粘土～シルト互層で、下部には巨礫が多く含まれている。遺物は出土していない。性格は不明であるが、層位的にみて時期は近世である。



第6図　SE1出土遺物

SD2

3～4区で検出した東西方向に直線的に延びる溝で、南肩を確



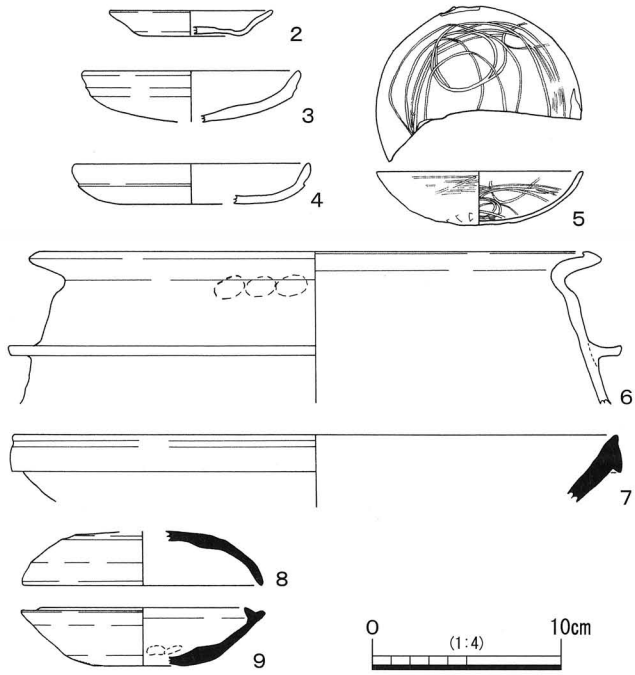
第７図　ＳＤ２・３断面図

認した。検出長約16m・幅1.1m以上・深さ約0.6mを測る。埋土はシルト質粘土基調の３層からなり、あまり流水状況にはなかったようである。

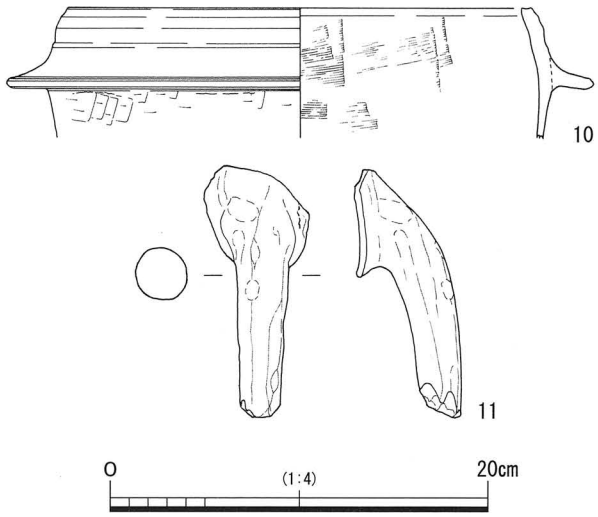
遺物は12～15世紀頃の土師器、瓦器、東播系須恵器の他、飛鳥時代の須恵器も出土している。２～９を図化した。２～４は土師器皿である。３・４の口縁部にはヨコナデによる段が明瞭に生じている。４は口縁部の一部が煤けており、灯明皿であろう。２が15世紀代、３・４は12～13世紀に比定されよう。５は高台の消失した瓦器椀で、内面の暗文は一連の渦巻き状である。13世紀末～14世紀初頭に比定される。６は口縁端部を巻き込む大和型の土師器羽釜である。14世紀代に比定される。７は東播系須恵器鉢で、12～13世紀に比定されよう。８・９は須恵器杯蓋・杯身で、飛鳥時代初頭に比定される。９の底部外面には自然釉が掛かる。

ＳＤ３

６区で検出した南北方向の溝で、検出長約1.2m・幅約1.5m・深さ約0.8mを測る。埋土は４層から成り、最下層がシルト質粘土～極粗粒砂の互層、上層は極細粒～細礫混シルト質粘土である。遺物は15世紀末頃までの土師器（皿・羽釜等）、瓦器（三足釜）、陶器（常滑焼？）が出土しており、10・11



第８図　ＳＤ２出土遺物



第９図　ＳＤ３出土遺物

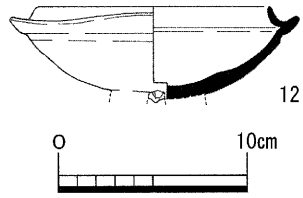
を図化した。共に瓦器で、10は羽釜、11は三足釜である。10は鍔端部に凹線が巡る。14～15世紀に比定される。

谷1

４・５区で検出した南から北に延びる谷状地形である。ブロック層により埋められており、その後、池の堤が盛土されている。

３区306層出土遺物

12は須恵器有蓋高杯の杯部で、歪みが大きい。脚部のスカシは２方向である。６世紀末に比定される。二次堆積の遺物であるが、当地が高安古墳群に近接することから勘案して、本来古墳の副葬品であったのかもしれない。



第７図　３区東壁出土遺物

４．まとめ

今回の調査では、中世末～近世初頭の井戸・溝等が検出され、当地に当該期の集落が存在していたことを確認した。６区西端では土壌化の著しい層位が見られ、集落域はさらに西に広がるものと考えられる。１～５区では洪水により遺構面が削平されている可能性がある。

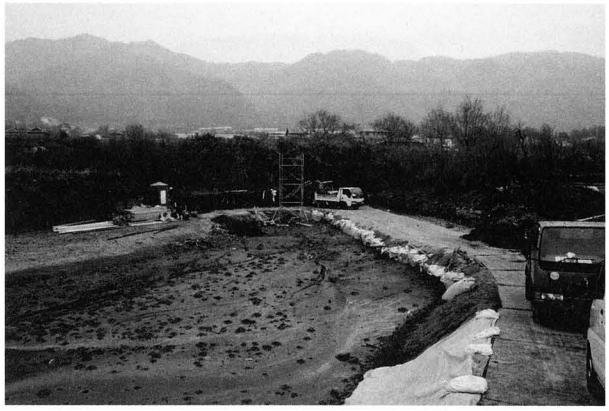
なお中世末に比定されるＳＤ２には飛鳥時代の須恵器が含まれており、付近にこの時期の集落が存在する可能性がある。

註

・岡田清一1997「Ⅲ　神宮寺遺跡（第１次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会

・原田昌則1999「Ⅲ　郡川遺跡（第２次調査）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

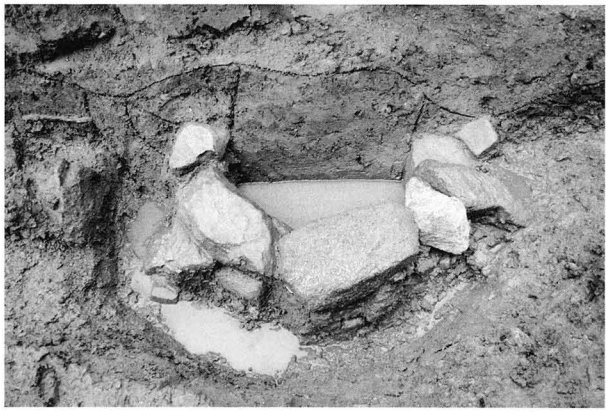


調査地（西から）

１区機械掘削（西から）

ＳＤ１（南から）

ＳＫ１（南から）



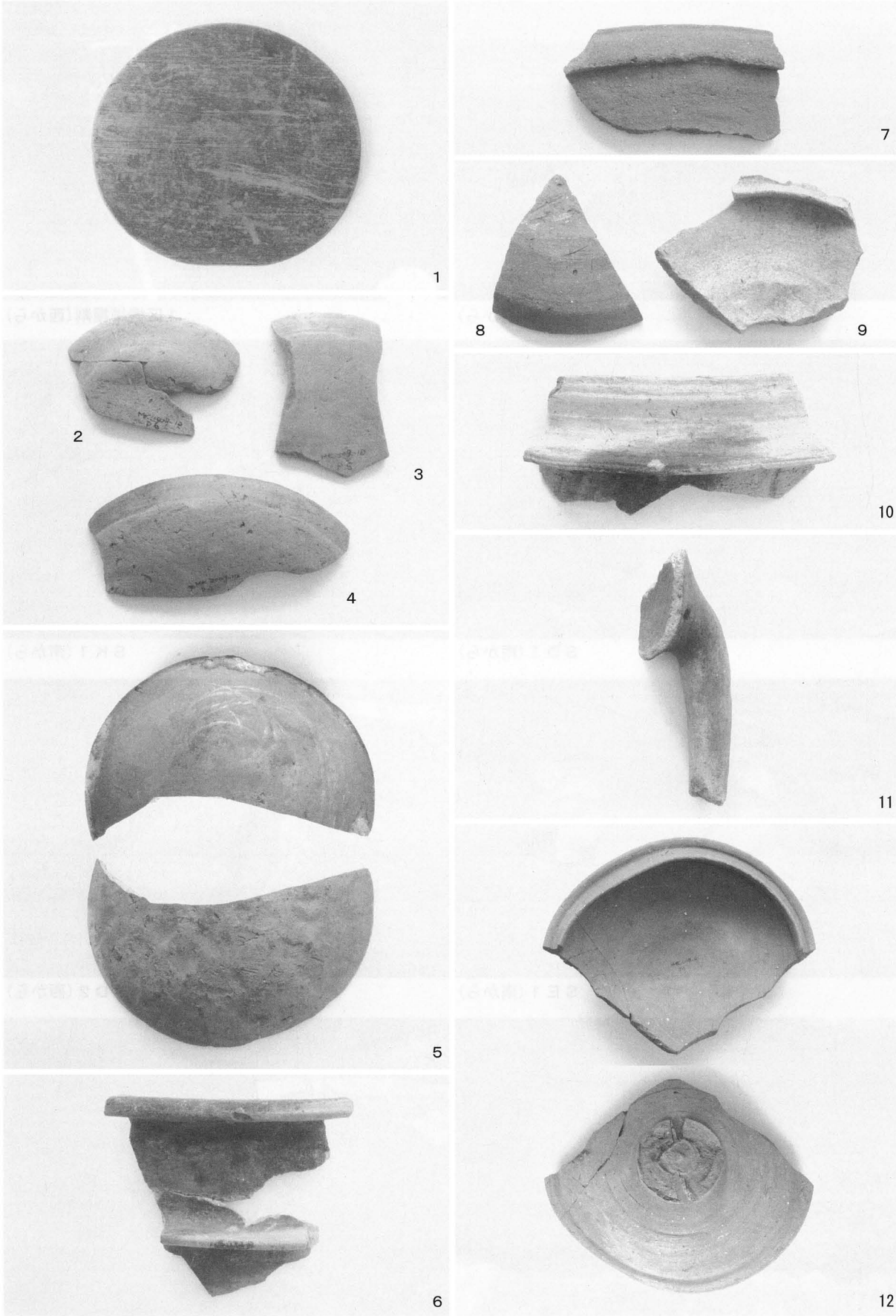
ＳＥ１（南から）

ＳＤ２（西から）

ＳＤ３（北から）

４区調査状況（西から）

図版2



ＳＥ１(１)、ＳＤ２(２～９)、ＳＤ３(10・11)、３区306層(12)

Ⅳ　八尾南遺跡第34次調査（ＹＳ2009－34）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市西木の本四丁目地内で、市営大正住宅集会所建替えに伴い実施した八尾南遺跡第34次調査（ＹＳ2009－34）の発掘調査報告書である。
1．本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1．調査は当調査研究会　成海佳子が担当した。
1．現地調査は、平成22年３月８日に着手し、３月30日に終了した（外業実働11日）。調査面積は約136㎡である。
1．現地調査には、市森千恵子・芝崎和美・田島宣子・村井俊子の参加を得た。
1．内業整理は現地調査終了後に着手して平成22年７月12日をもって終了した。
　遺物実測－市森・村井・山内千恵子、トレース－山内
1．本書の執筆・編集は成海が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……23
2．調査概要……25
　1）調査方法と経過……25
　2）基本層序……25
　3）検出遺構と出土遺物……25
3．まとめ……29

Ⅳ　八尾南遺跡第34次調査（ＹＳ2009－34）

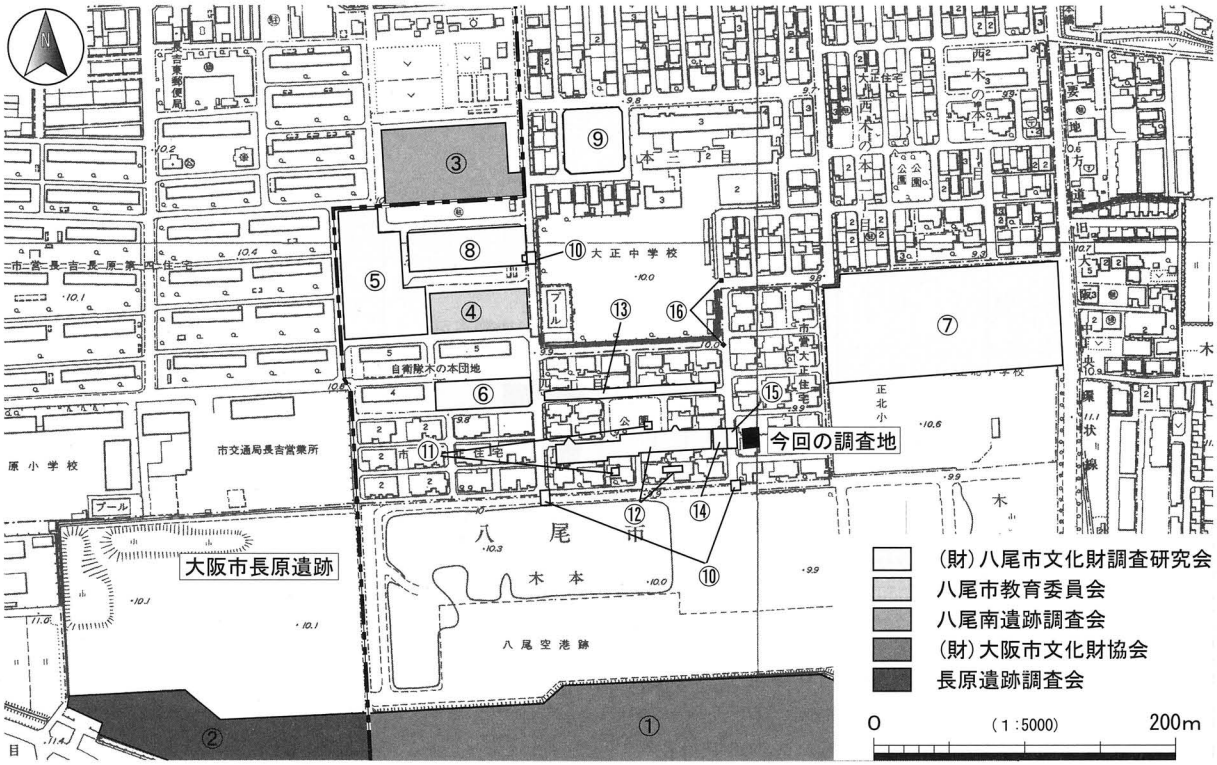
１．はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市南西部に位置している。現在の行政区画では若林町一～三丁目、西木の本一～四丁目の西部にあたり、東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。

地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野の南西部にあたる。地質的には概ね沖積地であるが、遺跡の南には羽曳野丘陵から連なる河内台地が、西には上町台地が存在しており、台地から低地への地形変化点にもなっている。

周辺には、北東に木の本遺跡、南東に太田遺跡、市境を挟んで北部から西部にかけては長原遺跡等の遺跡が隣接している。当遺跡は、長原遺跡で行われた地下鉄建設が発見の契機になっており、これを受けて行われた八尾南遺跡調査会による発掘調査が端緒となっている。調査の結果、当遺跡が長原遺跡とともに、旧石器時代～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなり、その後、八尾南駅南側を中心に大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって断続的に発掘調査が行われている。

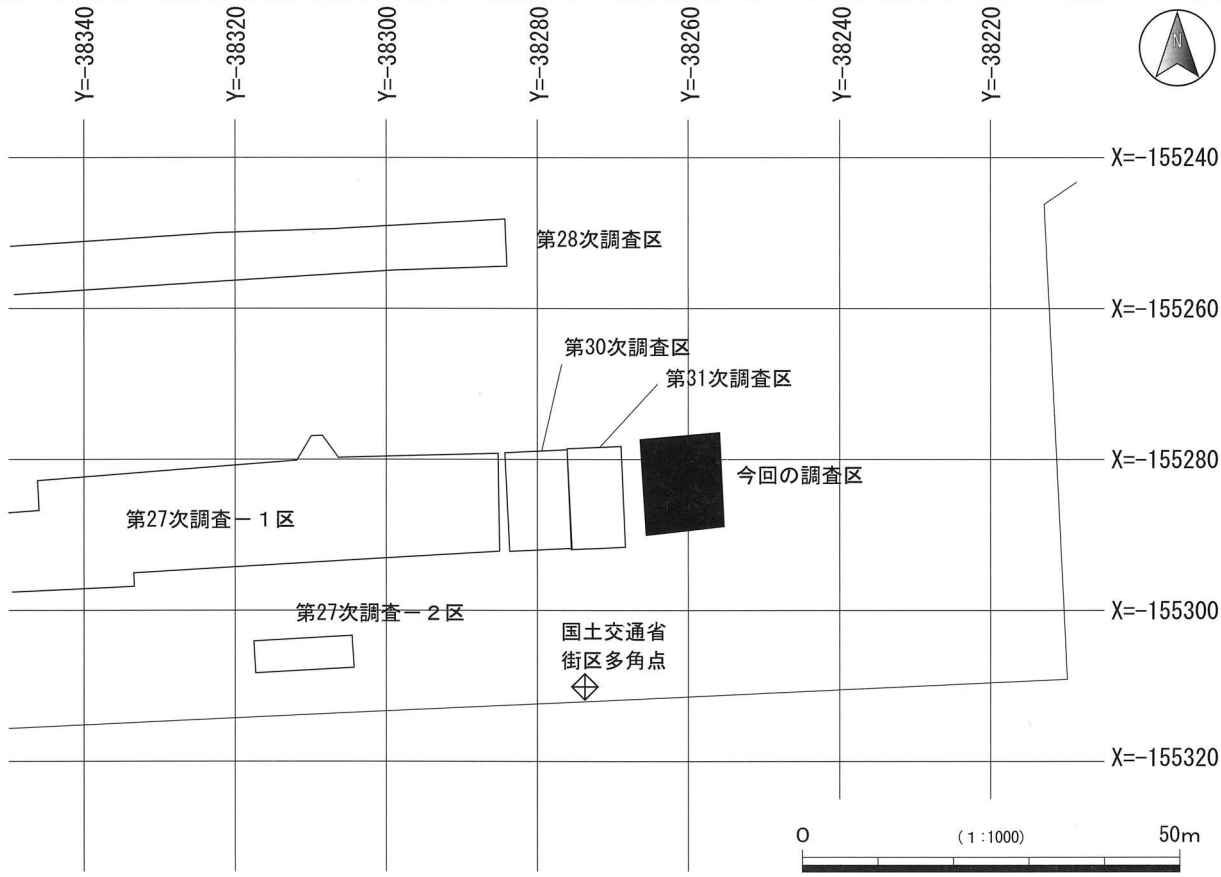
今回の調査地は遺跡の北部にあたり、近辺では、平成12(2004)年度から八尾市営住宅建替えに伴う一連の事業に伴う発掘調査を行っている(第１図－⑪～⑯)。これらの調査地では、古墳時代～近代までの居住域や生産域、河川等が検出されている。



第１図　調査地周辺図

第１表　調査地一覧表（第１図に対応）

番号	遺跡名(略号)	主な時代	種別	文献
①	八尾南遺跡	旧石器・縄文時代 弥生・鎌倉時代	? 生産域・墓域・居住域	米田敏幸他1981『八尾南遺跡－大阪市高速電気軌道２号線建設に伴う発掘調査報告書－』八尾南遺跡調査会
②	長原遺跡	古墳時代	墓域・居住域・生産域	永島暉臣他1982『大阪市平野区長原遺跡発掘調査Ⅱ』長原遺跡調査会
③	長原遺跡 (ＮＧ82－26)	縄文時代 平安時代	自然河川 生産域	(財)大阪市文化財協会1982『近畿財務局公務員宿舎に伴う長原遺跡発掘調査(NG82－26)略報
④	八尾南遺跡	古墳中期 平安	集落域 生産域	米田敏幸1983『八尾南遺跡(西木の本4丁目11番地)』(財)八尾市文化財調査研究会報告２
⑤	八尾南第３次 (YS84－03)	古墳時代 平安時代	生産域･居住域 生産域	原田昌則他1985『Ⅱ八尾南遺跡(第３次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告６
⑥	八尾南第６次 (YS86－06)	古墳～平安時代	生産域？	西村公助1987『４八尾南遺跡(第６次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告14
⑦	八尾南第７次 (YS86－07)	古墳時代 平安～鎌倉時代	生産域 生産域	西村公助1987『Ⅵ八尾南遺跡(第７次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告41
⑧	八尾南第10次 (YS87－10)	古墳時代 平安時代	生産域･居住域 生産域	成海佳子1988『12. 八尾南遺跡(第10次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告16
⑨	八尾南第18次 (YS92－18)	古墳時代	居住域	原田昌則2008『八尾南遺跡第18次調査発掘調査報告書』(財)八尾市文化財調査研究会報告117 (財)八尾市文化財調査研究会報告117
⑩	八尾南第19次 (YS93－19)	弥生時代 古墳時代	? 居住域	西村公助1994『Ⅷ八尾南遺跡(第19次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告43 (財)八尾市文化財調査研究会報告43
⑪	八尾南第26次 (YS2004－26)	古墳時代 平安時代	生産域 生産域	高萩千秋2005『Ⅲ八尾南遺跡(YS20054－26)の調査』八尾市立埋蔵文化財調査センター報告６
⑫	八尾南第27次 (YS2005－27)	古墳時代 平安～近世	? 生産域	島田裕弘2007『八尾南遺跡(第27次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告102 (財)八尾市文化財調査研究会報告102
⑬	八尾南第28次 (YS2006－28)	奈良～平安時代 平安～中近世	居住域 生産域・河道	成海佳子2007『八尾南遺跡(第28次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告114
⑭	八尾南第30次 (YS2007－30)	古墳時代 平安～近世	? 生産域	米井友美2008『八尾南遺跡(第30次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告121
⑮	八尾南第31次 (YS2007－31)	古墳時代以前 飛鳥～近代	自然河川 生産域	米井友美2009『Ⅲ八尾南遺跡第31次調査』(財)八尾市文化財調査研究会報告128 (財)八尾市文化財調査研究会報告128
⑯	八尾南第33次 (YS2007－33)	古墳中期 古墳後期～平安時代	集落域 生産域	西村公助2010『Ⅲ八尾南遺跡第33次調査』(財)八尾市文化財調査研究会報告131



第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は市営大正住宅集会所建設に伴う調査で、当調査研究会が八尾南遺跡内で行った第34次調査である。調査対象は建物部分（面積約134㎡）で、現地表（T.P.+10.1～10.3m）下１m前後を重機による掘削、以下の0.5mを人力による掘削、さらに0.3～0.4mを重機による二次掘削、さらに0.1～0.2mについて人力掘削を行った。座標は国土座標第Ⅵ系（世界測地系）を使用した。高さの基準は八尾市街区多角点20C32（調査地北約100m地点：T.P.+10.005m）を使用した。

２）基本層序

調査区全域は攪乱が多く、西壁北半分～北壁、西壁南部～南壁には、深さ２m以上に及ぶものがあった。

０層：盛土。層厚１m前後を測る。

１層：青灰色礫混粘土質シルト。旧耕土、層厚は調査区南部で0.2m前後が遺存する。

２層：灰褐色粘土質シルト。床土、層厚は0.2m前後を測る。この層上面が第１面である。上面の標高は9.6m前後を測る。

３層：灰色極細粒砂・褐色砂質シルトのブロック。層厚0.1～0.2m。

４層：灰色礫混粘土質シルト。層厚0.2m前後。この層上面が、河川ＮＲ301の最上層とともに第２面である。上面の標高は9.3m前後を測る。

５層：暗灰色礫混粘土質シルト。層厚0.2m前後。この層上面が第３面で、上面の標高は8.8m前後である。

６層：灰色粗粒砂。層厚0.1～0.3m。河川埋土・洪水砂と考えられる。

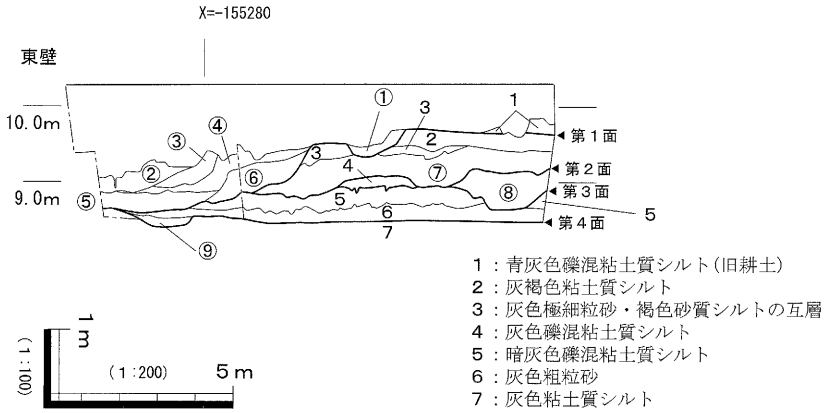
７層：灰色粘土質シルト。層厚0.1m程度までを確認した。この層上面が第４面で、上面の標高は8.8m前後である。

３）検出遺構と出土遺物

第１面では近世～近代の土坑や溝が検出されたが、第２面以下はすべて河川であった。

〈第１面〉

２層灰褐色粘土質シルト上面で土坑２基（ＳＫ101・102）、溝３条（ＳＤ101～103）、河川１条（ＮＲ101）を検出した。

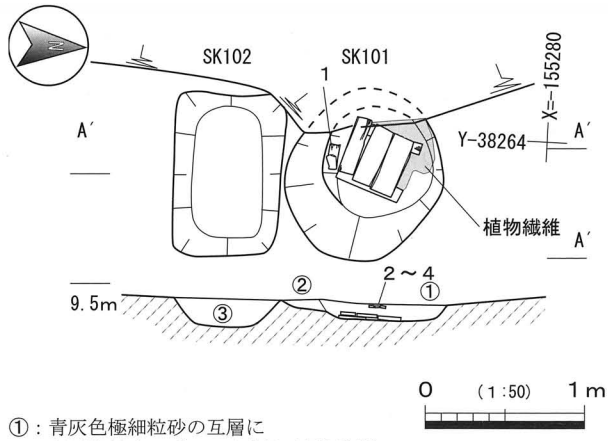


１：青灰色礫混粘土質シルト（旧耕土）
２：灰褐色粘土質シルト
３：灰色極細粒砂・褐色砂質シルトの互層
４：灰色礫混粘土質シルト
５：暗灰色礫混粘土質シルト
６：灰色粗粒砂
７：灰色粘土質シルト

〈ＳＤ101〉
①：青灰色粘土のブロック
〈ＮＲ101〉
②：暗灰色礫混粘土質シルト
③：暗灰色粘土
④：灰褐色粘土質シルトと極細粒砂の互層
⑤：灰色礫混粘土質シルト
⑥：灰色粘土質シルトと極細粒砂の互層
〈ＮＲ201〉
⑦：黄褐色細粒砂～粗粒砂
灰色砂質シルト～極細粒砂
淡褐色粗粒砂～礫
暗灰色礫混粘土質シルトの互層
〈ＮＲ301〉
⑧：黄褐色粗粒砂～礫
暗褐色礫混粘土質シルトの互層
〈ＮＲ401〉
⑨：暗灰色粗粒砂～礫

第３図　断面図

ＳＫ101：調査区北西部で検出した。西側は攪乱によって切られているが、おおむね楕円形を呈する。埋土は①青灰色極細粒砂の互層に青灰色粘土のブロック・②灰色極細粒砂からなり、底には植物繊維が敷かれている。直上には板材２枚が間隔をあけて「二」の字状に並べられ、さらにその上に板材３枚が直交して並べられている。上層からは不明木製品１～４が出土している。１は現状で半円形を呈するが、下端は欠損している。上部の中央向かって左寄りに上面から孔が穿たれている。その形態から下駄とも考えられるが、木取が横方向である。２～４は類似する小型の板で、一面に小孔が穿たれている。３枚並んで出土したことから、何らかの部品と思われる。



①：青灰色極細粒砂の互層に
　青灰色粘土のブロック（底に植物繊維）
②：灰色極細粒砂
③：灰色極細粒砂に褐色粘土のブロック

第４図　ＳＫ101・102平断面図

ＳＫ102：調査区北西部、ＳＫ101の南に接して検出した。東西に長い長方形である。埋土は灰色極細粒砂に褐色粘土のブロック、遺物は出土していない。

ＳＤ101：調査区中央南寄りで検出した。東から西に伸びる溝である。埋土は暗灰色粘土のブロック、遺物は出土していない。ＳＤ102・103を切る。

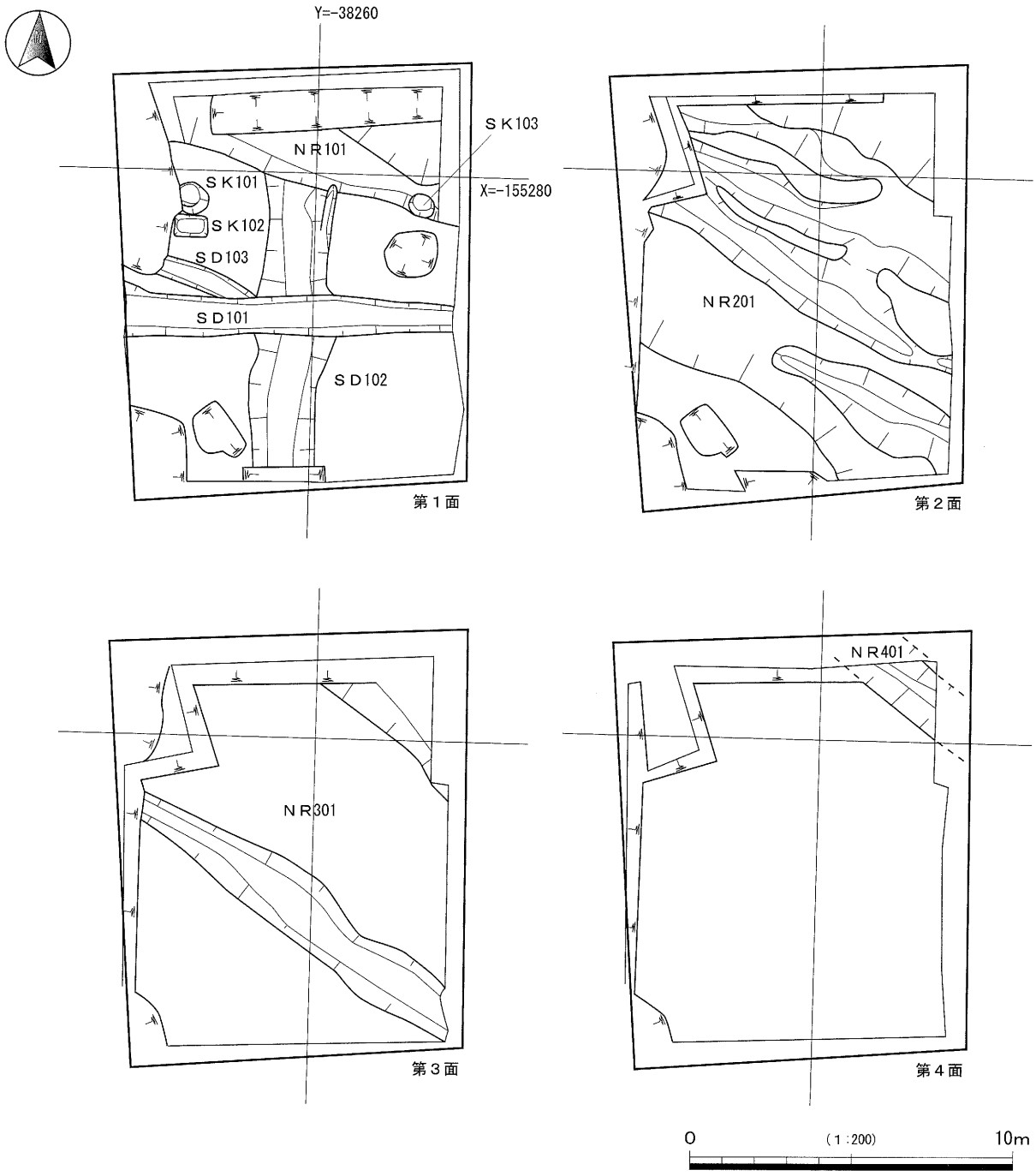
ＳＤ102：調査区中央で検出した。ＳＤ101に直交し、南から北に伸びる溝で、ＳＤ101・ＮＲ101に切られる。埋土は灰色粗粒砂に青灰色粘土のブロック。時期不明の土師器小片が若干出土した。

ＳＤ103:調査区中央西寄り、ＳＤ101・102の交点北西で検出した。東南東から西北西へ伸びる。埋土は灰色粗粒砂、遺物は出土していない。

ＮＲ101：調査区北部で南の岸を検出した。東南東から西北西へ伸びる。調査区内での深さは１ｍに達し、二段の肩を持つ。埋土は灰色系の粘土を主とし、極細粒砂との互層からなる。最上層は近～現代の攪乱に一致している。内部からは、古墳時代以降平安時代、中世、近世～近代の雑多な遺物が出土している。そのうち図示したものは板５・磁器碗６である。５は現状で半円形を呈し、一部に目釘が遺存する。柄杓等の曲物の底であろう。６は丸文を配する肥前系の碗である。

第２表　検出遺構一覧表

遺構名	法量(m)			形状・方向	埋土
	長辺	短辺	深さ		
ＳＫ101	1.1	0.9	0.1	北西－南東に長い楕円形	青灰色極細粒砂の互層に青灰色粘土のブロック 灰色極細粒砂
ＳＫ102	1.0	0.9	0.18	東西に長い長方形	灰色極細粒砂に褐色粘土のブロック
ＳＤ101	10.0	1.6	0.4	東→西	青灰色粘土のブロック
ＳＤ102	9.8	2.2	0.5	南→北	灰色粗粒砂に青灰色粘土のブロック
ＳＤ103	3.0	0.7	0.1	南東→北西	灰色粗粒砂
ＮＲ101	10.0	3.0以上	1.0	南東→北西	暗灰色礫混粘土質シルト 暗灰色粘土 灰褐色粘土質シルトと極細粒砂の互層 灰色礫混粘土質シルト 灰色粘土質シルトと極細粒砂の互層
ＮＲ201	12.0	11.0以上	0.5	南東→北西	黄褐色細粒砂～粗粒砂・灰色砂質シルト～極細粒砂・淡褐色粗粒砂～礫・暗灰色礫混粘土質シルトの互層
ＮＲ301	12.0	10.0以上	0.5	南東→北西	黄褐色粗砂～礫・暗褐色粘土質シルトの互層
ＳＤ401	6.0	2.0	0.15	南東→北西	暗灰色粗粒砂～礫



第５図　平面図

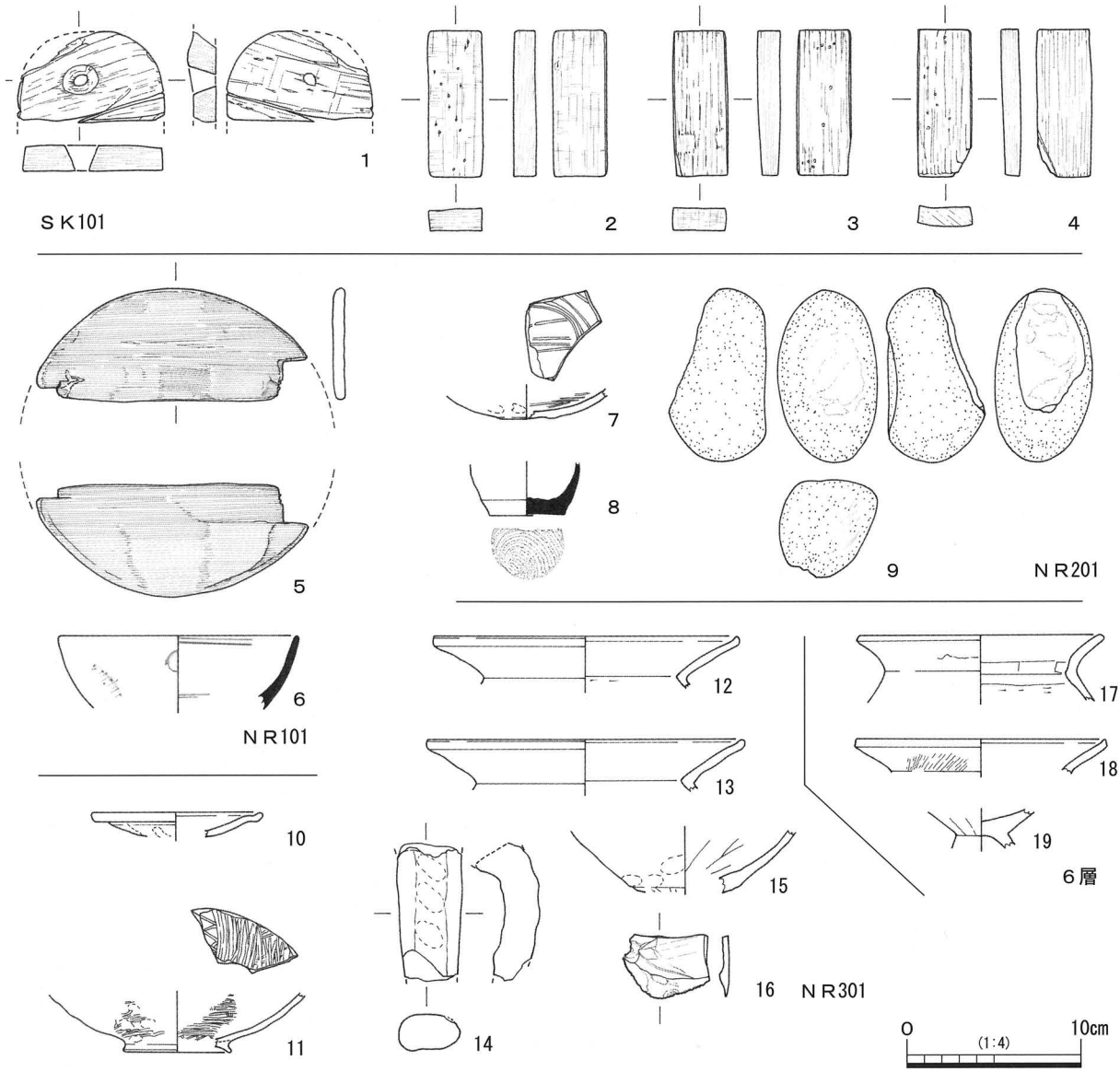
〈第２面〉

４層灰色礫混粘土質シルト上面で河川１条（ＮＲ201）を検出した。４層は調査区南西部で島畠状に高まっていたことから、当初北東側に水田のあることを想定したが、高まり部分はＮＲ201の肩となっていることが判明した。調査区内での深さは0.5m程度、南東から北西に流下している。川底には凹凸があり、緩やかに北東下がりとなっていることから、河川の氾濫によって水田面が削られた可能性も考えられるが確証は得られなかった。埋土は粘土質シルト～極細粒砂～細粒砂

～粗粒砂～礫の互層である。内部からは古墳時代の須恵器のほか、平安時代以降の土師器、黒色土器、瓦器などが出土している。図示したものは瓦器椀７、須恵器小型壷８、敲石９である。７は形骸化した高台を持つ終末期の瓦器椀である。８は底に回転糸切り痕を持つ。９は砂岩製で、下端に使用痕が残る。弥生時代のものであろう。

〈第３面〉

５層暗灰色礫混粘土質シルト上面で河川１条(ＮＲ301)を検出した。調査区内での深さは0.5m程度、ＮＲ201とほぼ同じ流路方向である。埋土は粘土質シルト・粗粒砂～礫である。内部からは弥生土器、庄内式土器、土師器、瓦器のほか獣骨等が出土している。図示したものは土師器小皿10、瓦器椀11、庄内甕12・13、弥生土器把手14・底部15、サヌカイト剥片16である。10は「て」の字形の口縁部を持つ。11は大型の高台を持ち密なヘラミガキを施す。12・13はいわゆる庄内式甕で、口縁端部のつまみ上げ・口縁屈曲部の稜はともに鈍い。14は弥生土器の大型の器種の把手部分で、接合部から剥落している。縦位の把手で、手づくね成形時の指圧痕が顕著に残る。15は



第６図　出土遺物実測図

弥生時代終末の壺・鉢底部と考えられ、底部の周縁にはヘラケズリが施されている。16は一辺に押圧剥離により刃部が作られている。

〈第４面〉

７層灰色粘土質シルト上面で溝１条（ＳＤ401）を検出した。調査区北東隅で検出した溝で、流路方向はＮＲ201・301と同じく南東から北西である。北側の肩には堤状のブロック層や杭が見られたが、調査区北東角に一致しているため、明確に図化できなかった。埋土は暗灰色粗粒砂～礫、遺物は出土していない。

〈６層出土遺物〉

第４面を覆う６層からは、庄内式甕17・18、小型器台19が出土した。いずれも小破片である。

３．まとめ

今回の調査では、既往調査同様、古墳時代から近世・近代に至るまでの４面の遺構面を検出することができた。

・第１面では、東西に伸びる溝（ＳＤ101）、南北に伸びる溝（ＳＤ102）が検出されたが、これらは近世の区画溝と考えられる。河川（ＮＲ101）は、その方向や埋土から、第28次調査地河川１と同一のものと考えられ、当地が軍用地として開発される直前まで機能していたものと考えられる。

・第２面では、調査区のほぼ全域が河川（ＮＲ201）であったが、この河川も北西の延長が第28次調査地河川13に求められる。埋没時期は瓦器椀７から、鎌倉時代末～室町時代前期頃に比定できる。

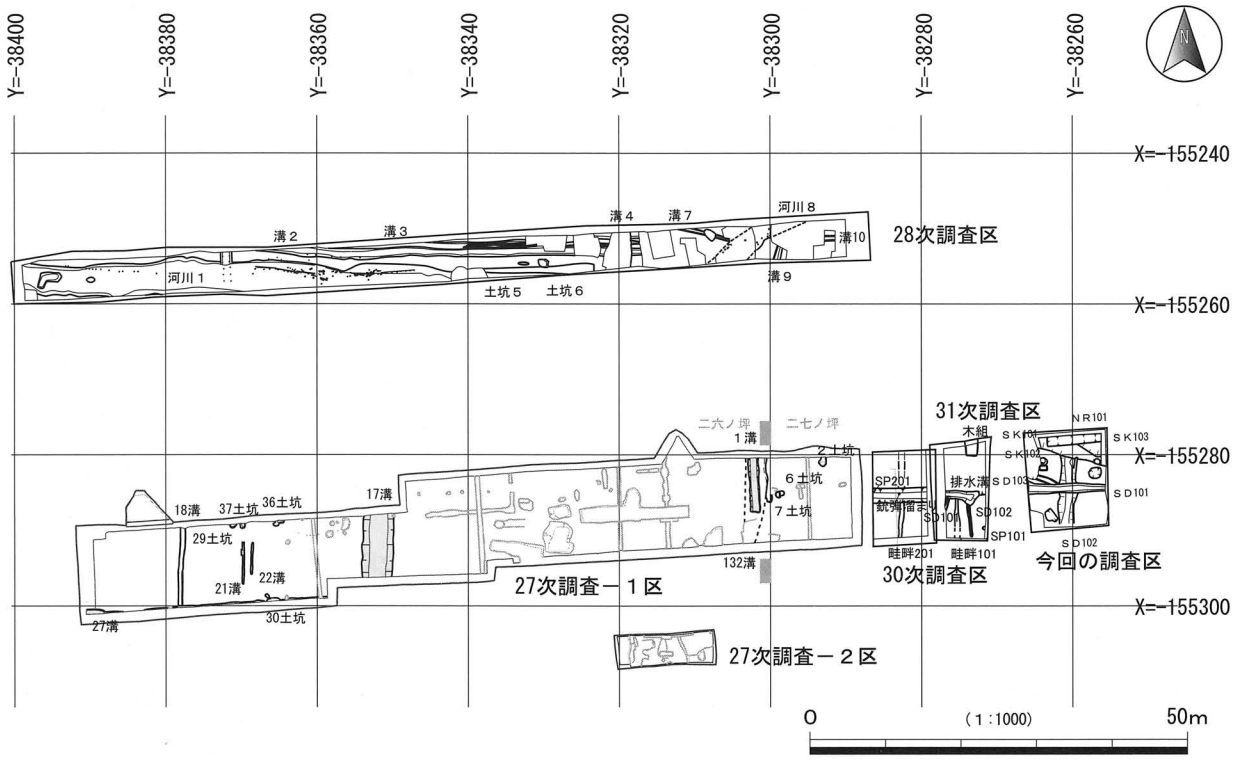
・第３面もＮＲ201と同方向に流れる河川（ＮＲ301）である。埋没時期は土師器小皿10・瓦器椀11から、平安時代後期に比定できる。

第３表　出土遺物一覧表

番号	出土地	器　種		法量（cm）幅×長×厚		備　　考
1	ＳＫ101	木製品	不明	8.3×5.2×1.5		上面から錐状の工具で円孔（径0.5×0.8cm）を穿つ　横木取
2	ＳＫ101	木製品	板	3.1×8.4×1.3		一面に小孔あり　横木取
3	ＳＫ101	木製品	板	3.1×8.4×1.3		一面に小孔あり　横木取
4	ＳＫ101	木製品	板	3.1×8.5×1.1		一面に小孔あり　縦木取
5	ＮＲ101	木製品	曲物底板	15.5×6.4×0.7		目釘遺存
6	ＮＲ101	磁器	碗	口　径	(13.4)	丸文、口縁内面に圏線
7	ＮＲ201	瓦器	椀	高台径	(2.8)	ヘラミガキは体部粗い横方向・見込み平行、高台は紐状
8	ＮＲ201	須恵器	小型壺	底　径	4.2	底部回転糸切り
9	ＮＲ201	砂岩	敲石	5.6×9.9×5.6		一面に使用痕
10	ＮＲ301	土師器	小皿	口　径	(9.5)	「て」の字形口縁部
11	ＮＲ301	瓦器	椀	高台径	6.0	ヘラミガキは体部密な横方向・見込み斜格子高い
12	ＮＲ301	庄内式土器	甕	口　径	(17.3)	口縁端部のつまみ上げ、口縁屈曲部は鈍い
13	ＮＲ301	庄内式土器	甕	口　径	(18.0)	口縁端部のつまみ上げ、口縁屈曲部は鈍い
14	ＮＲ301	弥生土器	把手	8.0×3.7×2.1		手づくね成形
15	ＮＲ301	弥生土器	壺・鉢	底　径	(6.1)	底部周縁部をヘラケズリ
16	ＮＲ301	サヌカイト	剥片	4.8×3.7×0.4		一辺に押圧剥離による刃部あり
17	６層	庄内式土器	甕	口　径	(13.7)	口縁端部はつまみ上げない、口縁部は二段に屈曲する
18	６層	庄内式土器	甕	口　径	(14.2)	口縁端部側面は凹面状
19	６層	古式土師器	小型器台	基部径	3.0	

・第４面では、北側の岸に堤状の盛土を持つ溝ＳＤ401を検出した。遺構内の出土遺物は無かったが、上層に堆積する６層からは庄内式甕17・18、小型器台19が出土していることから、掘削・埋没時期は古墳時代前期初頭に近い時期が想定できる。

以上のように、当地は近世以前には南東－北西方向の流路の南岸にあたり、北東下がりの地形を呈していることがわかった。また、遺構を検出するには至らなかったが、弥生土器のほか同時代の石器、古墳時代中期の須恵器の出土などもあり、近隣の調査成果とともに多大な成果が得られたと考えられる。

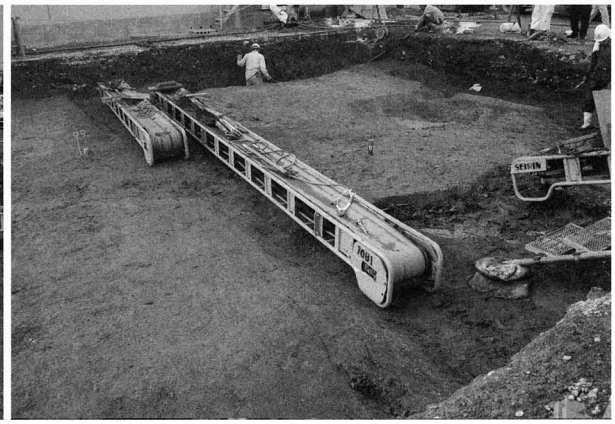


第７図　周辺の調査区平面図（第１面）

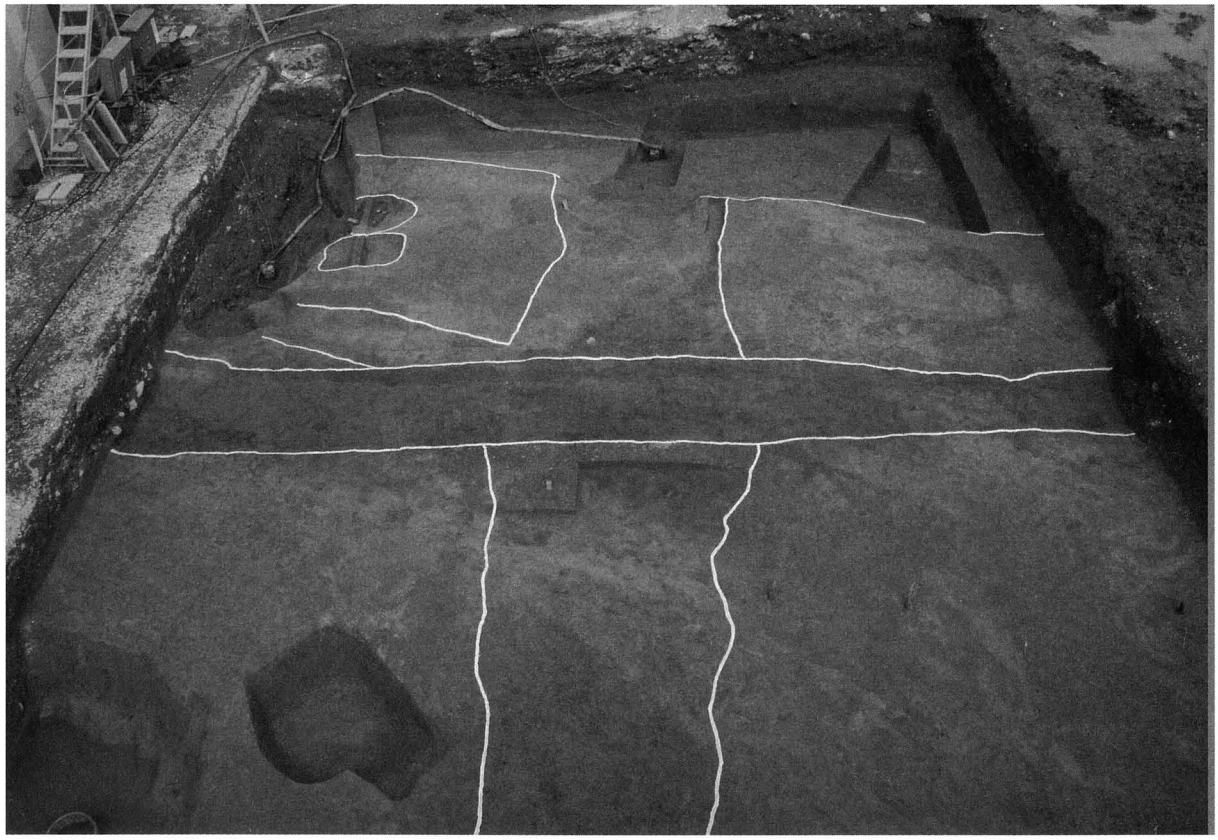
調査地近景　南西から

機械掘削状況　南西から

人力掘削状況　南から



第１面検出状況　南東から



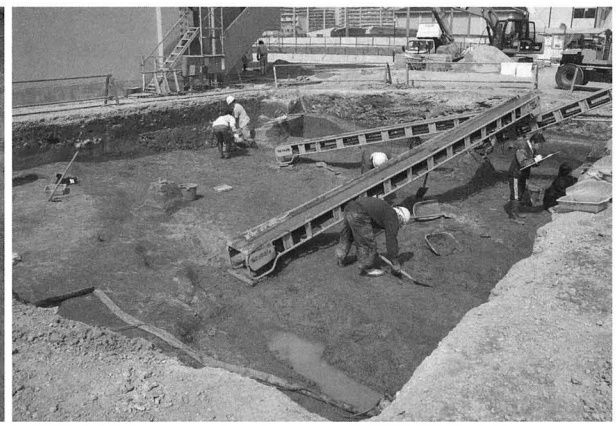
第１面全景　南から

図版2

第１面ＳＫ101　東から

同掘削状況　北から

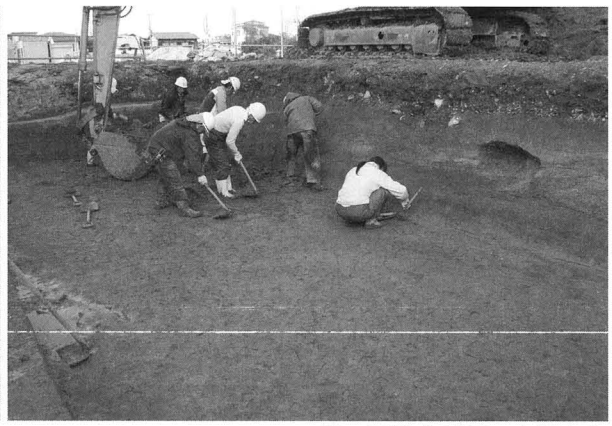
同完掘　上が西



第２面検出状況　南東から

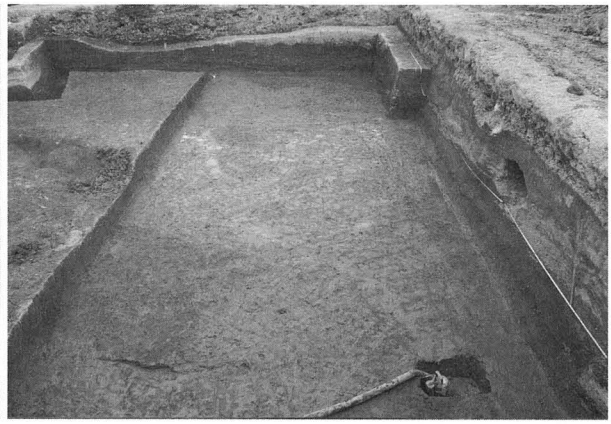
第２面全景　南から

第３面検出状況　南東から



第４面検出状況　南西から

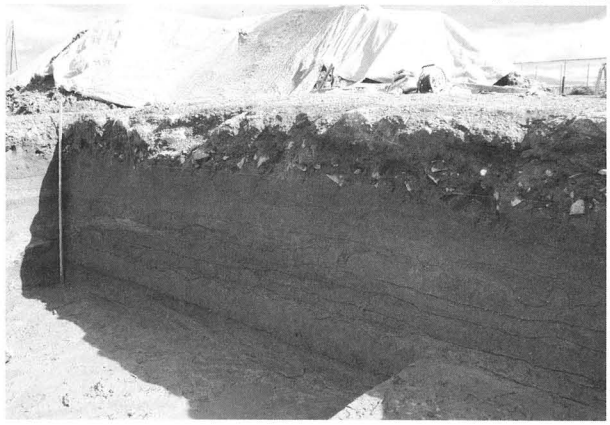
第３面全景　南から



第４面全景　南から

調査区北壁

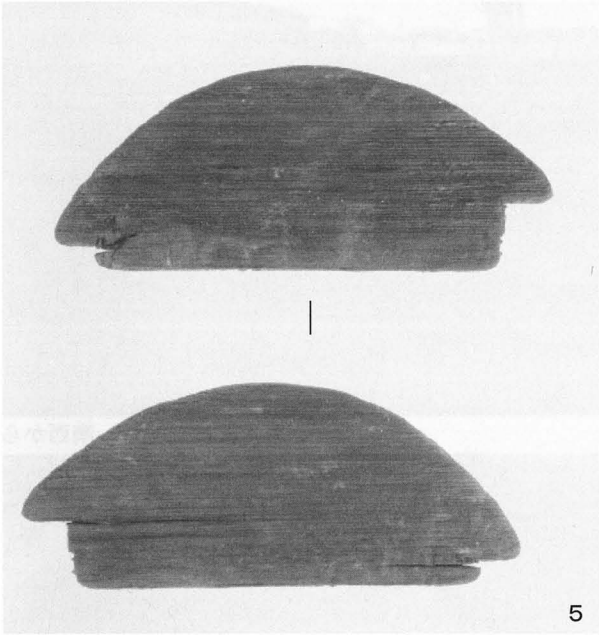
同　東壁

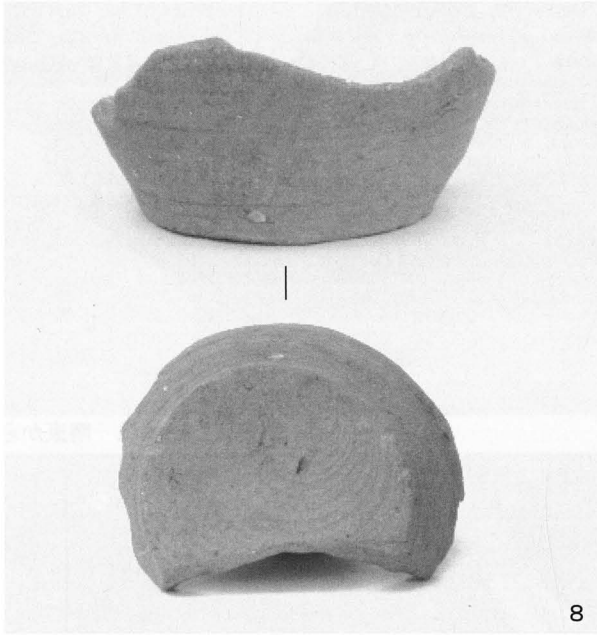


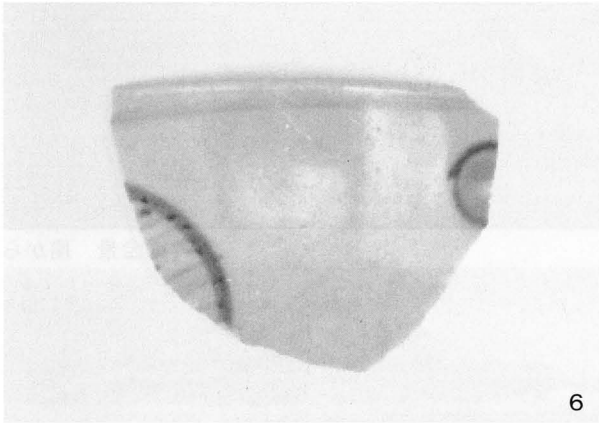
同　南壁

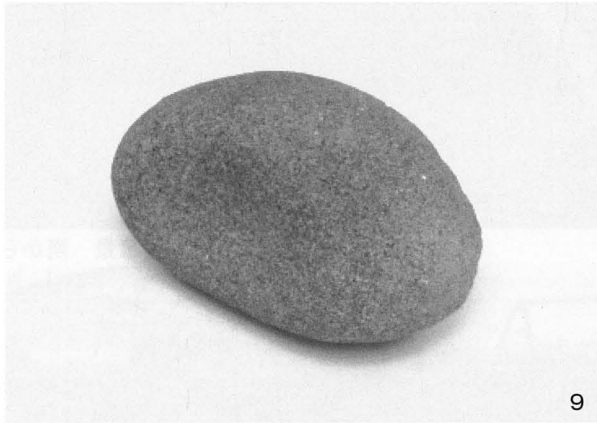
同　西壁

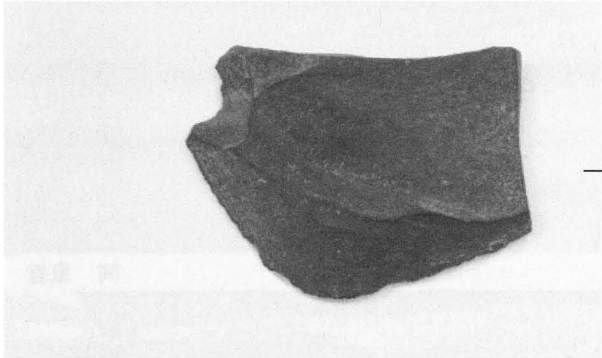
図版4

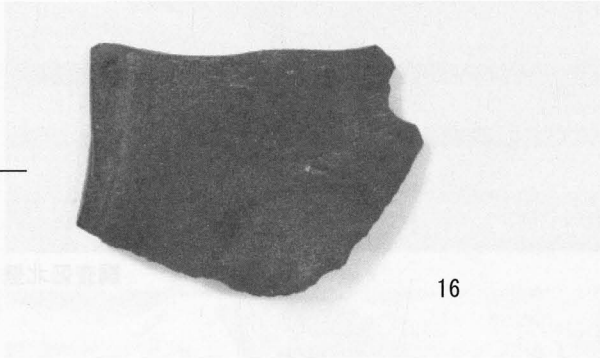












Ⅴ　八尾南遺跡第35次調査（ＹＳ2010－35）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市若林町一丁目２で実施したエレベーター設置工事に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する八尾南遺跡第35次調査（ＹＳ2010－35）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大阪市交通局から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成22年６月４日～６月７日（実働２日）に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約16㎡である。

1．現地調査・内業整理業務においては、伊藤静江・田島宣子・永井律子・山内千恵子の参加を得た。

1．整理業務は、現地調査終了後随時実施し、平成23年３月に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……35
2．調査概要……36
　1）調査の方法と経過……36
　2）基本層序……36
　3）検出遺構と出土遺物……36
3．まとめ……38

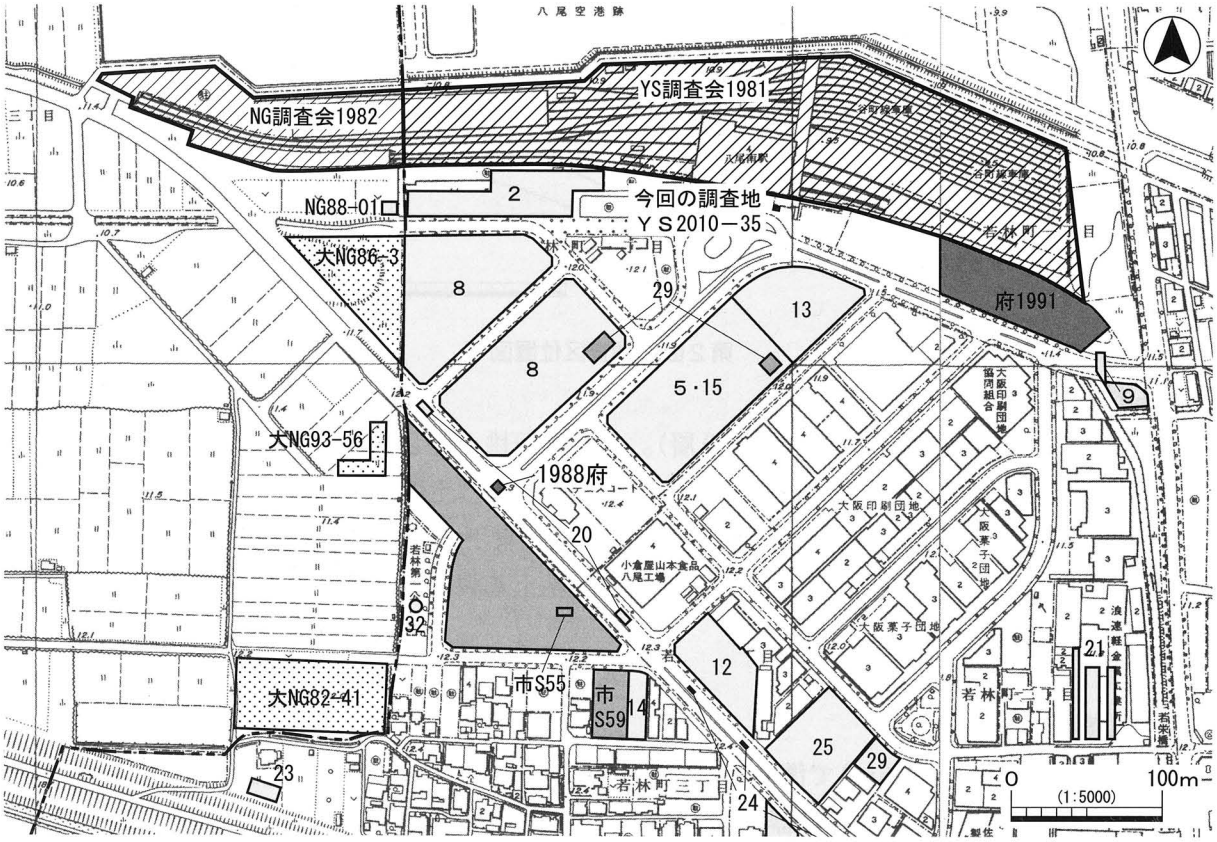
Ⅴ　八尾南遺跡第35次調査（ＹＳ2010－35）

１．はじめに

八尾南遺跡は大阪府八尾市南西部に位置している。現在の行政区画では若林町１～３丁目、西木の本１～４丁目の西部にあたり、東西約0.5km、南北約1.3kmがその範囲とされている。周辺には、北東には木の本遺跡、南東には太田遺跡、市境を挟んで北部から東部にかけては長原遺跡等の遺跡が隣接している。地理的には旧大和川及びその支流河川による活発な沖積作用によって形成された河内平野の南西部にあたる。地質的には概ね沖積地であるが、遺跡の南には羽曳野丘陵から連なる河内台地が、西には上町台地が存在しており、低地から台地への地形変化点にもなっている。

当遺跡は、今回の調査地でもある地下鉄八尾南駅建設が発見の契機になっており、これを受けて行われた八尾南遺跡調査会の発掘調査が端緒となっている。調査の結果、当遺跡が旧石器時代～中世にかけての複合遺跡であることが明らかとなり、その後、駅南側を中心に大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター・八尾市教育委員会・当調査研究会によって継続的に発掘調査が行われている。

今回の調査地は遺跡北部にあたり、前述の地下鉄八尾南駅建設に伴う発掘調査地の南に近接している。この調査においては特に古墳時代における成果が多大で、居住域・生産域・墓域からなる集落遺構を確認している。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

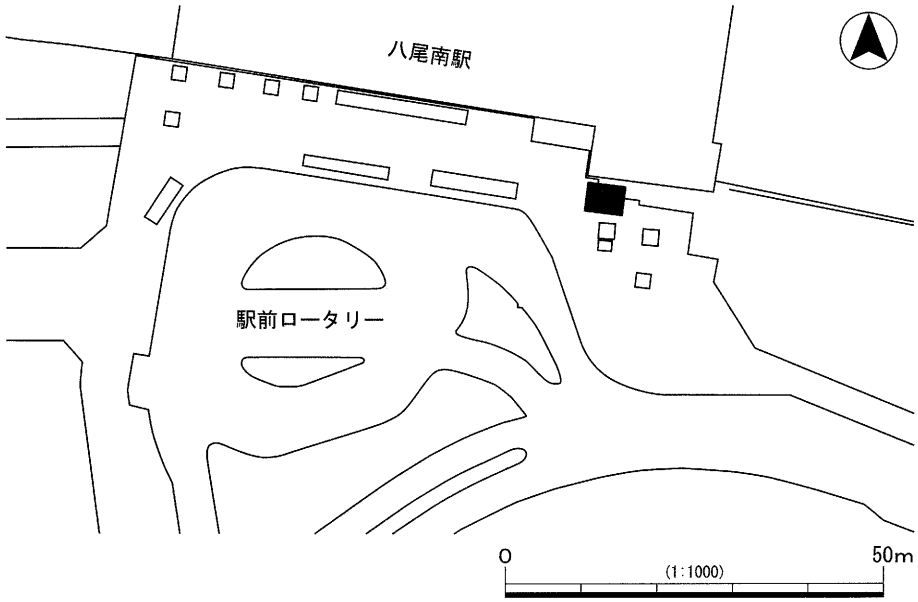
1）調査の方法と経過

今回の調査は地下鉄八尾南駅南側でのエレベーター設置工事に伴う調査で、当調査研究会が八尾南遺跡内で実施した第35次調査（ＹＳ2010-35）に当たる。

調査範囲は約4.0×4.0mの正方形、面積約16.0㎡であったが、調査地には約4.0×5.2mの範囲で鋼矢板が設置されており、実際にはこの範囲を調査している。

調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表（約T.P.+14.5m）下1.8～2.0mを機械掘削し、以下の0.3m前後については人力掘削により調査を実施し、適宜下層確認調査を実施した。なお残土置き場確保のため掘削・埋め戻しを繰り返しながらの調査で、結果的に調査区を４分割しての調査となった。また既設建造物（階段）の基礎杭が存在したため、北西部は一部調査が不可能であった。

調査で使用した標高の基準は、調査地南部約25mに位置する八尾市街区多角点（３級基準点相当）〈20C56：T.P.+11.484m〉である。



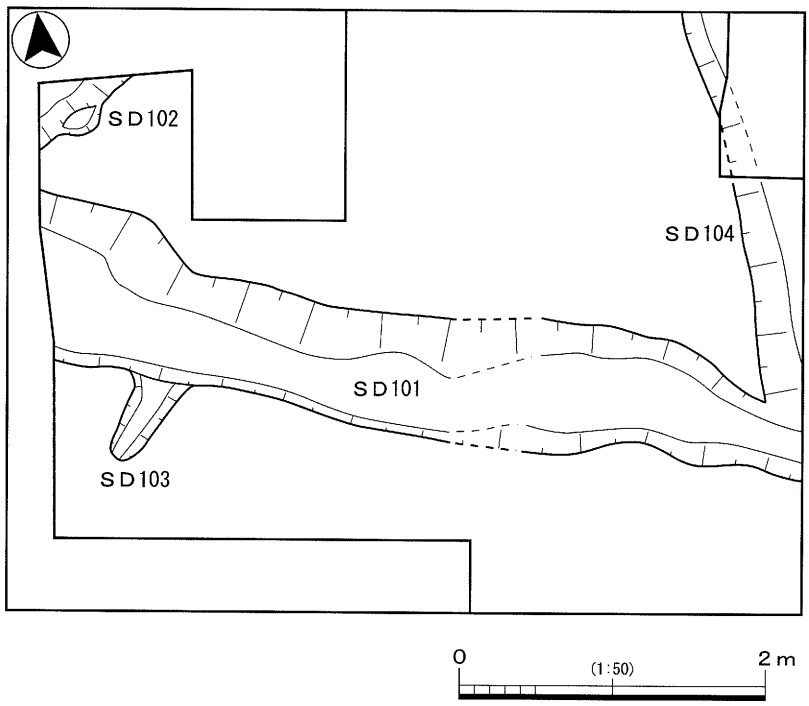
第２図　調査区位置図

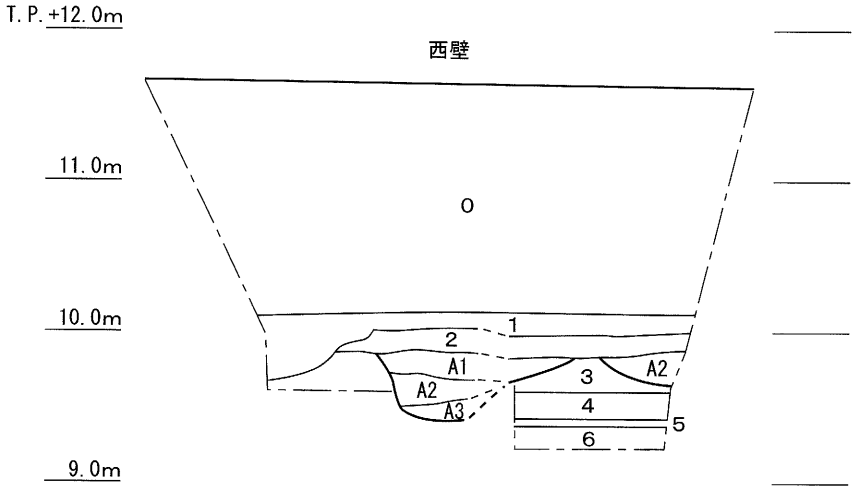
2）基本層序

現地表下1.8～2.0mまで盛土・撹乱（０層）。１層は旧耕土。２層は撹拌された作土である。時期不明の土師器片や弥生時代後期の甕片が見られた。３層は土壌化し、やや暗色を呈する。上面が遺構面で、標高は西部でT.P.+9.8m、東部で9.6mと東下がりとなっているが、２層の作土が東ほど深くまで及んでいるためである。４層以下は粘土基調の水成層で、５層細粒砂～中粒砂の薄層は一時的な洪水砂の可能性がある。

3）検出遺構と出土遺物

３層上面（T.P.+9.8～9.6m）で溝４条（ＳＤ１～４）を検出した。なお３層上面に貼り付く状況で平安時代後期に比定される土師器皿が１点（１）出土している。





０：盛土
１：5GY3/1暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂混粘土質シルト　旧耕土
２：2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混シルト～極細粒砂　Fe斑
３：10YR6/1褐灰色シルト～極細粒砂混シルト質粘土　Fe斑
４：10YR5/6黄褐色極細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　Fe斑極多
５：2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～中粒砂
６：2.5Y7/4浅黄色粘土　Fe斑多

ＳＤ101～103
A1：5GY6/1オリーブ灰色シルト～細粒砂互層（ＳＤ103）
A2：2.5Y6/4にぶい黄色粘土ブロック混極細粒砂～細粒砂（ＳＤ102）
A3：2.5GY5/1オリーブ灰色粘土ブロック混細粒砂～中粒砂

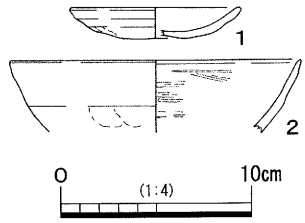
ＳＤ104
2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状

第３図　平断面図

１は口径9.0cmを測り。口縁部は二段のヨコナデを施している。

ＳＤ１

ほぼ東西方向に伸びる溝で、幅1.05～0.9m・深さ約40～20cmを測る。底部や側壁に窪みが多く見られ、埋土は３層からなり、上層はシルト～極細粒砂互層の流水堆積、中・下層も流水堆積で粘土ブロックを多く含む。下層から黒色土器椀（２）・土師器片が各１点出土している。２は口径15.2cmを測るＢ類の黒色土器椀で、不明瞭であるが内面に細かいヘラミガキ、ハケが確認できる。平安時代後期に比定される。



第４図　ＳＤ１出土遺物

ＳＤ２

ほぼ南北方向に伸びる溝で、幅75cm以上・深さ20cm以上を測る。埋土はブロック状の単一層である。南部でＳＤ１と合流している。遺物は出土していない。

ＳＤ３

北西部で一部を確認した遺構で、溝であろう。幅35cm以上・深さ22cm以上を測る。埋土はＳＤ１の中層と同じである。検出状況から西部でＳＤ１と合流している可能性が高い。遺物は出土していない。

ＳＤ４

ＳＤ１南肩に取り付く溝で、幅約25cm・深さ約15cmを測る。埋土はＳＤ１上層と同じである。遺物は出土していない。

３．まとめ

調査では平安時代頃に帰属すると考えられる溝群を検出した。北側の調査では平安～鎌倉時代の水田耕作とその灌漑に関連する遺構（河道・溝等）が検出されており、これらの遺構群に含まれるものであろう。

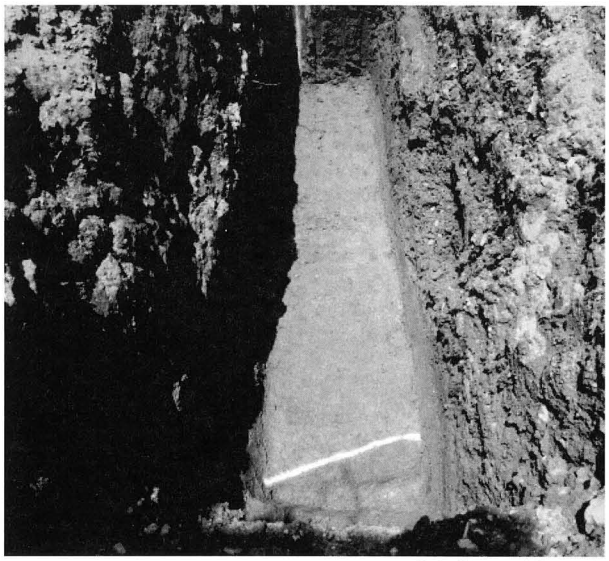
これより下層については粘土基調の水成層が確認された。北側調査成果によると、当地は東西の微高地に挟まれた谷状地形にあたっており、生活には適さない環境であったと考えられる。

参考文献

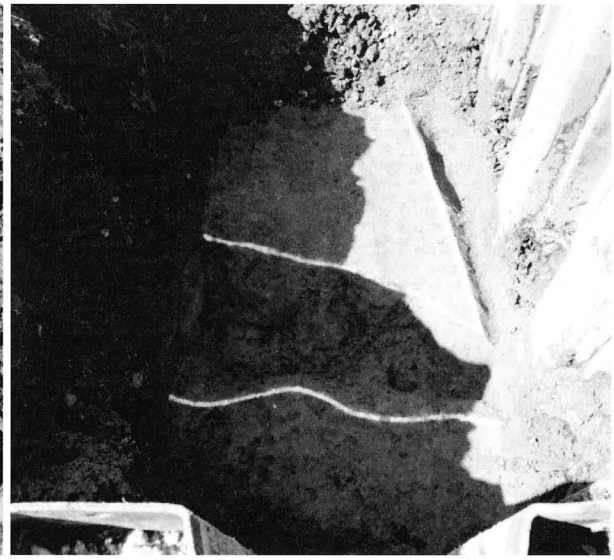
・米田敏幸・他1981『八尾南遺跡－大阪市高速電気軌道２号線建設工事に伴う発掘調査報告書－』八尾市教育委員会

北部機械掘削（南西から）

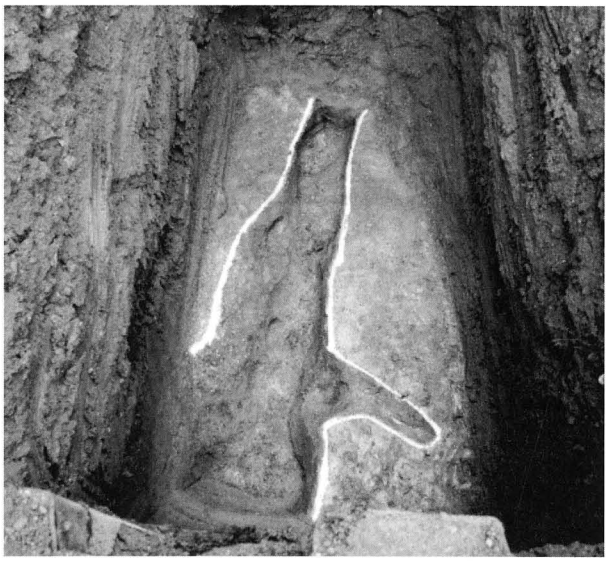
西部機械掘削（北西から）



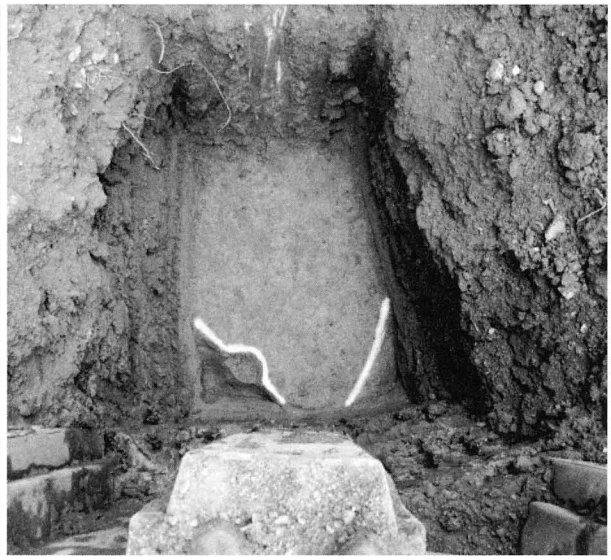
北部第１面（東から）



東部第１面（南から）

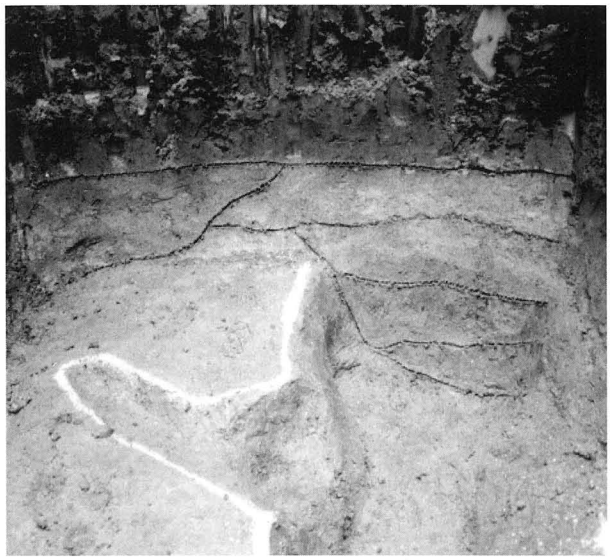


西部第１面（西から）



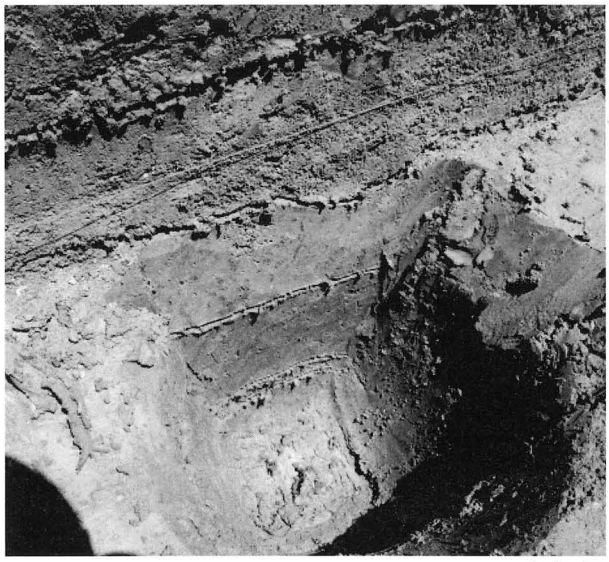
北西部第１面（西から）

図版2



西部西壁

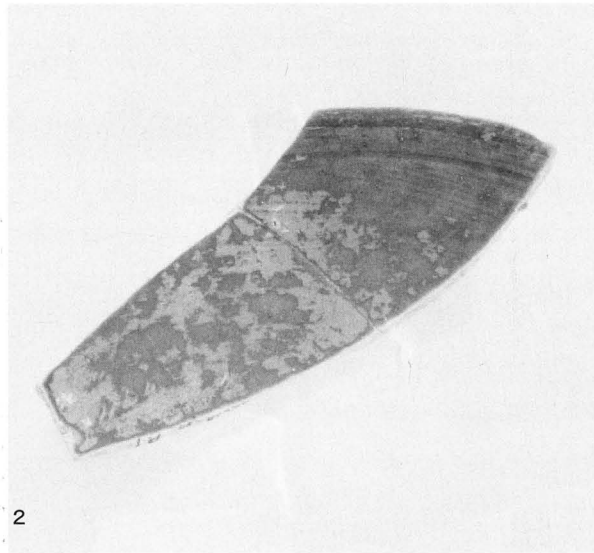
北西部西壁



北壁下層

西部掘削状況

1



2

報　告　書　抄　録

ふりがな	うえまついせき　おおたけいせき　みずこしいせき　やおみなみいせき
書　　名	植松遺跡　大竹遺跡　水越遺跡　八尾南遺跡
副 書 名	
シリーズ名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	134
編著者名	Ⅰ・Ⅳ成海佳子、Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ坪田真一(編)
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2011年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積(㎡)	発掘原因
うえまついせき 植松遺跡 (第11次調査)	おおさかふやおしやすなかちょう４ちょうめ 大阪府八尾市安中町４丁目	27212	63	34度 37分 03秒	135度 35分 50秒	20100126	約６	記録保存調査
うえまついせき 植松遺跡 (第11次調査)	おおさかふやおしうえまつちょう３・４ちょうめ 大阪府八尾市植松町３・４丁目	27212	63	34度 37分 01秒	135度 35分 49秒	20100127 ～ 20100203	約36	記録保存調査
おおたけいせき 大竹遺跡 (第２次調査)	おおさかふやおしみずこし８ちょうめ 大阪府八尾市水越８丁目	27212	56	34度 38分 08秒	135度 38分 42秒	20110125 ～ 20110127	約15	記録保存調査
みずこしいせき 水越遺跡 (第10次調査)	おおさかふやおしみずこし７ちょうめ 大阪府八尾市水越７丁目	27212	42	34度 37分 58秒	135度 38分 42秒	20100112 ～ 20100119	約95.3	記録保存調査
やおみなみいせき 八尾南遺跡 (第34次調査)	おおさかふやおしにしきのもと４ちょうめ 大阪府八尾市西木の本４丁目	27212	67	34度 35分 58秒	135度 35分 02秒	20100308 ～ 20100330	約136	記録保存調査
やおみなみいせき 八尾南遺跡 (第35次調査)	おおさかふやおしわかばやしちょう１ちょうめ 大阪府八尾市若林町１丁目	27212	67	34度 35分 49秒	135度 34分 58秒	20100604 ～ 20100607	約16	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
植松遺跡 (第11次調査)	集落	近世	落込み、自然河川		
植松遺跡 (第12次調査)	集落	近世	溝		
大竹遺跡 (第２次調査)	集落				
水越遺跡 (第10次調査)	集落	鎌倉時代 室町時代	溝 井戸	土師器、須恵器、瓦器、国産陶器 円形板	
八尾南遺跡 (第34次調査)	集落	古墳時代前期 平安時代後期 鎌倉～室町時代 近世	溝 自然河川 自然河川 土坑、溝	土師器、瓦器 須恵器、瓦器 国産磁器、木製品	
八尾南遺跡 (第35次調査)	集落	平安時代	溝	土師器、黒色土器	

要　　約	植松遺跡では古大和川の主流であった長瀬川に起因する砂層を確認した。大竹遺跡は表土直下が地山層であった。水越遺跡では、八尾市域東部の比較的高所においても、鎌倉～室町時代の集落が展開していたことを確認した。八尾南遺跡では古墳時代前期、平安時代の遺構を検出した。

（財）八尾市文化財調査研究会報告134

Ⅰ　植松遺跡　（第11・12次調査）
Ⅱ　大竹遺跡　（第２次調査）
Ⅲ　水越遺跡　（第10次調査）
Ⅳ　八尾南遺跡　（第34次調査）
Ⅴ　八尾南遺跡　（第35次調査）

発　行　平成23年３月
編　集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地２
TEL・FAX 072－994－4700

印　刷　㈱近畿印刷センター
表　紙　レザック66　＜260Kg＞
本　文　ニューエイジ　＜70Kg＞
図　版　ニューエイジ　＜70Kg＞